# 随筆集光の中へ

前田衛作

光の中のリオ	サンダーバードに乗って 41	南九州の旅 33	門司港レトロの夜24	峠越え18	富岳憧憬1	ウェディングステップ 4
あとがき	軽井沢散歩	土肥ブルー	英虞湾の風に泣いたあなたへ 75	螺旋階段	初めてのヴィアージェム 63	飛騨高山へ

の小春日和 この日に、 娘へ の結納があ った。

年末年始には、 娘と私たち夫婦との三人だけの、 恐らく最後の家族旅行をした。

慌ただしく時は過ぎて、はや娘が嫁ぐ五月になっていた。

披露宴の冒頭で読まれる娘のプロフィールを書き終えていたので、今度は私が娘に贈 セージを書いてもらえないかと司会を務めてくれる娘の友人から依頼があった。 る言葉を認めた。 結婚式の 一週間ほど前に、二次会でサプライズを用意したい の 新婦  $\sigma$ メ ッ

ていた。 とホテル 平成二十三年五月十四日、 の庭園に出ると、 淡い太陽光をうけて一 美しい朝を迎えた。 羽の燕が青空の中ほどを悠然と舞っ 新鮮な朝の冷気を身体に取り込もう

今日、 娘は、 結婚式を挙げ

屋に呼ばれた。 プを習った。娘を新郎に渡す動作も覚えて完璧な仕上がりだと思った。 親族の紹介を済ませると、 わずか三畳ばかりのスペースで、 新婦の父である私だけが新郎新婦が控えて にわか仕込みにウェディ ン グス テ

プを厳かに踏んで、 面に見据えて歩みを進めよう。 がら入堂するだけだ。 神父と新郎は既に入場を終えて祭壇の前で準備を整えているはずだ。 チャペルで我々の登場を心待ちでいるだろう。 確実に娘を新郎 かねてから心の準備はしていたから、 臍は固めている。 のもとへ届けよう。 迷いはない。 あとは穏やかな笑みを湛えな 扉が開いたら祭壇を真正 悲しみもない。 招待客や参列 ステッ

が開いた……。

ディ 左右にぶれてよろめ ン グステップがうまくい 次は右足を出して、 れつ……。 自分の身体が自分の身体ではない いている。 かない。 左足を揃える。 父としての威厳などもはや無くなっていた。 ぎこちなさが自分でもよくわかる。 たったそれだけの、 みたいだ。 左足を出す、 簡単なはずの 右足を ウェ

「おとーさん頑張って」という悲鳴のような声が聞こえた。

5

聞き覚えのない声だった。

よほど不甲斐なく惨めな歩みなのであろう。 熱い励ましと思えた。 哀れに思った誰かが思わず発したに違

6

ンロードの父は、今、物笑いの種になっていることを知った。 ふと見やると妻がおかしそうに笑っ そればかりでなく、 間違いなくチャペルに居合わす皆が笑っ てい る。 横目で 一瞥すると娘まいちべつ ている……。 で が笑っ て

調を合わせることだけに専念しよう……。 が奏でる曲までが染み入るようで心地よい。ままよ、 いことではないという気がするのだ。 事ここに至りながら、不思議なことに随分と心は落ち着いてい 動悸はしないし周りも見えて、 せめて笑顔を崩さずに娘と歩 アンサン

えてある滝には、 夫となり妻となった二人が花びらのシャ 私は、やさしく、 祭壇は窓から降り注ぐやわらかな春の陽射しに満ちてい が交わされて「二人が夫婦になったことを宣言する」と神父が言った。 無数の清らかな水滴が神々しいばかりに煌めいている。 そっと娘の背を押して、 ワーを浴びてバージン 待ち受けていた花婿へ、 た。 大きな窓の 口 娘を捧ぎ ードを退場して げ 0

った。

花束贈呈の場面 さらに突き上げるように上昇してまぶたから溢れた。 めた。虚を衝かれた。 いよいよ披露宴もフィナーレを迎えようとしている。ここまではこらえおおせた。 が訪れた。 想定外の展開だった。 あろうことか、母と娘は抱擁し合い、打ち揃って嗚咽を始 私の咽元にも熱いものが込みあ 全てが霞んで見えた。 げてきて

と言って前方を見つめ直した。口は恐らく真一文字にきつく結んでいただろう。 は水を打ったように静まり返っていた。誰ひとりとして笑ってはいなかった……。 娘から一輪の花を左の胸ポケットに挿してもらった私は、「ありがとう」とひとこ ひとつの家族のひとつの時代を区切るセレモニーは終わった。

後日ビデオで見てもあの滑稽で愚かそうなステップが、 演技した訳ではない。 「式でのお父さん面白かったね」と、娘の友人が三次会で語ったらしい。 花嫁の緊張をほぐしたことだけは間違いない。 ウケを狙った訳でもない。 私は一所懸命で必死であった。 娘もそう認めている。 チャペル全体に笑い をもたら

身も世もない

ほどの号泣をせずにすんでよかったねと妻からは慰められ、

か

9

8

がら自ら演技してみせた。なるほど、うべなるかな。 また妻は、

うに頼りなく危うく気をもませるような歩みではなかったのか、 えてくれた。 振り返ってみると私たち夫婦の二十八年の歩みも、 披露宴での様子については花嫁の両親の姿に感涙した人もいたと、 あのウェ ーディン という気がする。 あとで新郎が教 グステッ プ

のエピソードを交えて、 二次会のために用意した「父から娘へ 大まか私は次のように娘へ語り掛けた。 の手紙」の中で、 命名の由来や娘 0

むしろ安堵の胸をなでおろしてい その時がきたなら無条件で祝福してやろうと父はいつも心に決めていた。 しくはないというと嘘になるが、 おまえが選ぶ結婚相手なら決 して間違いはあるまい る。 親としての務めをひとつ果たしたと思えば と固く信じてい

新夫婦に贈りたい言葉がある。

「楽則能久、楽しまば則ち能く久し」

要は、楽しくなければ何事も長続きしない、 ということだ。 1.

に楽しんでほしい。

に幸多からんことをこい願 く思っている。 きょうのおまえは若い頃の母親に似て最高に綺麗であったぞ。父は誇ら いまいちど心からおめでとう、 っている。 と言おう。 そして若い

この間、 読者の朗読を皆が清聴してくれた、 このメッ 何かを必死にこらえているようだったと、後に娘がもらした。 セージは、 娘にとっては正に不意打ちの贈り物となったらし というのである。 ありがたいことである。 1, しかも代

女には心から感謝している。 の友人も、 完全無欠なサプライズを届けられたと、 大満足してくれたらしい。

京都駅から新神戸駅への約三十分間をタイ ムトンネルのように抜けると、 つい数時

間前の出来事が切なくも懐かしい、 明日からは私たち夫婦もまた、 新たな歩みを始めようと思う。不器用であろうとも、 まるで遠い昔のことのように思えた。

せめて真っ直ぐな歩みを……。

(平成二十三年五月)

### 富岳憧憬

落ちている。二つの台風十五号、十六号が呼び込む湿った大気が、 せられていることを報じていた。勝手口から東の空を見上げると、 ングに降りてテレビの電源を入れると、テロップが播磨南東部には大雨洪水警報が発 もよいにしているのだ。 遠雷が身体と耳を震わせて目が覚めた。時計を見ると朝まだき三時半だった。 小糠雨が音もなく 日本列島全体を雨 リビ

こんな日に僕たちは旅に出る。

めている。 の新幹線以外は時間に束縛されないこころ穏やかでスローな安らぎの旅にしようと決 晩夏 暦の上では立秋を過ぎているが、 季節感としてはまだ夏だ。往きと還り

あとは何も求めない。 憧憬れていた。 もし幸運に恵まれて富士山が見られたならばただそれだけで良く、 富士を愛でる旅が始まる

を渡り三島駅に着いた。

緩めるほどの驟雨に見舞われた。 駅前の トル先が霞んだ。 レンタカー会社で予約し 国道一三六号線を南下しながら昼食場所を求めた。 て ワイパーをハイスピードにセット V たホ ン ダ 0 フ イ ッ トを借 時折、 りて アクセルを思わず 運転席 してもわずか五 13 腰を 下

珠沙華が咲き誇っていた。と煌めきが、僕たちの心を優し がしい が見えた。 山間の道から駿河湾に出てしばらく行くと、 伊豆長岡パノラマ 傘を携えて修善寺の町をそぞろ歩いた。雨に洗われてみずみずしい竹林のそよぎと 呼び名もあるらしいが、 僕たちの心を優しいものにしてくれる。遊歩道には天界の花とい パ クの ヒガンバナと呼ばれるこの花は、 口 僕はずっと昔から秋の訪れを告げる花だと思ってきた。 プウ エイ乗車は、 左手の堅牢な石積みの上に瀟洒な建物 ゲリラ雨に辟易 死人花などというまがま てあ きら われる曼

「あっ、 れだし と僕が言うと、 事前 に宿の ことを調べ尽くして V た妻も大きくうな

ずい た。

ことを示す碑があった。 エントランスの右手に、 この地が近くのこども達がかつ て通った学び舎の跡である

敷地に入ると、 0 中 の静謐 な台地に密やかに佇 んで Vi

だったと初めて知った。 ここは西伊豆、 土肥、八木沢地口今宵の宿は里山の 八木沢地区。 土肥は佐渡に次ぐ産出量を誇る金山で栄えた町

や野菜を食材とした、 インがあった。 ぬ幸せを味わった。 の洋風茶碗蒸しと、 ラル コースだった。 は「大地と潮の薫る旬彩な味覚の奏膳」と銘打たれた、 誇りを持って提供してくれて 炙り松茸をシマアジ 季節を感じさせる優雅な食事を満喫した。 良質な厚手の紙に印刷されたメニューにはシェ のカル いるのだろう。 パッチョで巻いた品には、 地元でとれる新鮮な魚介 中でも、 和 テイ えも言われ フォア フの直筆サ ス 0 グラ フ

今の季節の富士を青富士と言いますと教えてくれた宿のスタ とも言っ た。 期待しておこう。 今日 \_\_\_\_ 貝 富士は \_\_\_ ツ 度も姿を見せなか フ は、 明日はチャ 2 た。 ン

目 の朝、 五時。 妻に起こされた。

14

## 「富士山が見えているわよ

空を背景に富士の輪郭がくっきりと駿河湾に浮かんでいるように見えた テラスに出ると、 まだ辺りは暗く山 の端は黒々としてい るのに、 明るみ 始め た暁 0

てくる。 解き放たれてゆく……。 光を放っている。 頭上には一週間前、 目の前一面にそそり立つ霊峰富士の威容を飽くことなく眺めた。 柔らかな陽光が隈なく降り注いできて、 仲秋 の空で蒼白い望月だったその月が、下弦の月となっ 心が晴れ晴れと温か 己の ~くなっ て 淡

今日 の目的 地は下田の予定だ。

コン 徒歩で越えたのだと思うと、 天城を越えた。 トロ ルできなくなり、 つづら折り その 口 l の急な下り坂に ・ギア 困難な天城越えが偲ばれた。 の助けを要した。 なると、 フィ いにしえの人たちはこ ットは セカ ンド では 速度を の峠を

ていた。 蓮の滝は、 あたり一面にはきめ細かなミスト 昨日の大雨のせい か水量は多く轟音を響かせて正に瀑布 が濃厚に漂っ て いて膚にひんやりとした涼 0 社観と

気が心地よ 61 自宅用にワサビを一本買い 求めた。

の姿がおかしかった。 撮ってもらった。 ろしかった。 河津七滝の 滝巡りの小径で ループ橋はその螺旋から今にも飛び出して奈落に落ちてしまい 皺がよって干からびたような顔ながら、 「伊豆の踊り子」の像の肩を抱いて、 幸せそうに写っている自分 書生気分で写真を そうで恐

を買って、 もとの錆びた大砲が往時の面影を残し の華やかなヨット 下田の港はまるで南洋 新婚五ヵ月目の娘夫婦に送った。 が停泊し の異国のような光景だった。 ていた。 ペリーロー ていた。 ドを歩いていると、 小さなこの町で金目鯛や鯵などの干物ドを歩いていると、港に注ぐ小川のた 眩ぎし い太陽に照らされて 数多く

夫婦なので恋人岬は横目に通り過ぎた。 宿への帰途、 堂ヶ島に寄ってみやげ物を買った。 僕たちはもう銀婚を三年も過ぎた

んできた。 夕食前に御影石作 なぜかふと、 けれども僕ならば、 太宰治の りの露天風呂にのんびりと浸っ 「富士には月見草がよく似合う」という言葉が思い 黄単色の月見草とは異なり、 かりながら広大なパ 多彩な色を競って咲きな ラマ を見 浮 晴

がら、 その名に「調和のとれた宇宙」という意味をも包含して いるコスモスの方が

富士にはよく似合う、 は糸のように細く白い航跡を残しながら富士の裾野に添ってゆっくりと行き、 夕暮れ 土肥港を出たフェ と思った。 リー が、 入り日を浴びてこが ね色に輝 Vi て V٦ やが 7

共にした。 富士です、 たにないことで、 浴衣姿でく 今日 つろぎながら夕食を堪能 は 文字通り有り難いことですとスタッフが誇らしげに言った。 胸を張ることができますと嬉しそうに語る笑顔に、 した。 今の季節で一 日中富士が望めるの 僕たちも歓びを 最高 は め 0 つ

姿を消した。

駿河湾 0 部屋に戻ってまたテラスに出た。 夕刊には かが り火は伊勢エビ漁だったに相違な の岸近くで数艘 「伊勢エビ漁解禁」と大見出 の小舟がかがり火を灯し 空も海も里も暮れゆき、 しでー て揺蕩うて 面 のト ツ プ記事になっ いた。 漆黒の闇に包まれ 翌日の伊豆日日 て いたから、

三日目、 やはり午前五時に目覚めてデッキに出る。 今日もきっと晴天に なる 0 だろ

う。 中の空無に融け込んでいった……。 空の青、 を現してきた。 必ず姿を現すはずの富士を待望していた。 朝になっ 曙がぼの 山の青、 てきた。 空の色をこんな風に眺めたことはなかった。 圧倒的な勢いで迫りくる富士を目の当たりにして胸の深奥が震えた。 海の青が渾然一体となって、 富士はほとんどが雲居に隠れて 見る見るうちに雲は霧消し富士がその 全てのものの境が無くなり、 いる。 澄み渡る朝風をうけて、 朱鷺色から爽やかな水色の 僕も青 僕は

旅を終えて四日後、 妻は三キロも目方をふやしたけれど、 還りの新幹線の中、 夏がもうすぐ終わろうとしている……。 富士山頂の気温は氷点下五度三分まで冷え込んで初冠雪した。 まどろみつつ癒され浄 笑顔が めら 一段と丸みを帯びて素敵になった。 れ、 新生した自分を感じた。

(平成二十三年九月)

### 峠越え

18

その風景を美しいと思った。

芦ノ湖を渡って Và く船の二階デッキ に、 ひ っそりと寄り添う若夫婦の姿があ つ た

妻の肩越しに同じ画面を覗い 彼女は夫の厚い 胸に自分の背を預けて、 ているようだ。 伏 し目にス マホ 0 パ ネル な見て Vi 彼も

かもしだしてくれて たのであった。 このふたりの、 穏やかで満ち足りた笑顔が眩 のどかでうららかな仲良き風景に、 いる。 しい。 まことに春風駘蕩 輝き溢れるような美しさを感じ の感を、 自然に

はためかせて、 陣の風が湖畔 乱れ髪にした。 の林を揺らし、 加速度を増して吹きすさぶ。 彼女の髪の毛をあお

光景をい つかどこかで見たことがある、 と思 つ た。

#### 1 タニ ツ ク.....。

には、 ロマンスに酔 映画 洋々と開けた未来があるのみである。 **『**タイ -タニッ いしれている光景だ。 ク の冒頭近く、 物語は悲しい結末に終わるが、 主人公の男女が船 の舳先で風をうけて、 今の若い ふたり

「マイ ウィル . ゴ ー・オン」

セリー ヌ ・ディオンが歌ったあの歌を、 心の 中で歌った。

びだしてきそうな気がした。 しらが無数に砕ける。それに見入っていると、 海賊船は次第に大きく荒波立ってくる湖を、 切り裂くようにい 今にも崖の上のポニョ が、 湖面 の白  $\mathcal{O}$ ょ V 61

岸した。 元箱根港を出た観光船は、 箱根神社の大きな赤鳥居を右手に見て過ぎ、 桃源台 に接

ル、 箱根口 時間 トル にして約十六分間の空中遊歩だった。 の大涌谷と名付けられた山頂へと一気に登る。 プウ 工 イに乗り込んで、 標高七四一 メ ル 距離にして約二五四 の 始発駅から標高 0 \_ O Ż 兀 几

とびこんできた。 下方の桃源台方面を振り返り見 雪舟が描い 清楚で静謐な「おぼろ富士」である。 た一幅の絵画 れば、 のような、 柔らかな浅緑色に 人の心を吸い寄せる光景だ。 パ ステルカラー かすむ富士山が視界一面 Ö

岩や、 底は、 大涌谷の頂が近づ 荒涼として痛 白く吹き上がる噴煙がある 17 々 てきた。 しい光景だった。 緑あふれるはずの春な のみで、 硫黄でただれた黄土と、 硫化水素の憂鬱で のに、 眼下 V とわし 茶褐色に焼 一三〇メ V 死 の臭い け 13 0)

ちてい ラは、 早雲山を目 なぜか った。 指す下 ŋ Ó 方 ŋ が 0 ずっ 口 と速く プ ゥ エ 、感じる。 イに乗り替え 深い 谷に 吸い n 込まれ ŋ るように勢 同じ速度 Vi 0 ゴ ド

東両は 的 均時速は約五キ 標高七六一 な大きな窓には、 の ん X  $\mathcal{C}_{\mathcal{C}}$ Ď 口 メ ゆ 深 0 つ 早雲 くりと標高差二〇六メ Ш |幽谷 ル 山駅で、 になるから、 0 みずみず 箱根登山 ウォ 、色取り ケ トル キ ブ ン を下 取 グ程度の ル ŋ 力 Ó った。 の 錦じか、 るや 'n 車時 UI 次 な速度だ。 間を考えると

### ように展 開

ゆるり ブ Và たところは ゆるりと下 の軌道をい まるで足もとを確かめるように、 って 強羅。 Vi 中 には ここで箱根登山電車に接続する。 直 季節であれ 角に近い 曲がり ば、 日本では一番、 アジサイ 角もあるら 列車となっ 世界でも二番目 しい 列 車 . は渓流 スイ ていただろう。 に沿 ッ チ 0 つ 急勾配を て ツ クを繰

に取り込むと、 全開 の車窓から渓谷を渡っ 思わず「生きてい てきた涼や るぞ」と叫びたいような衝動に駆られた。 かな風が吹き込んできて、 その空気を 0

駅に至った。 四十分少々 乗車で標高差四四五メ ルを下り、 標高一 〇八 メ ル

こうし 「天下 を いともたやすく越えて しまっ た.....

するかのように、 相模湾に沿 った国道に出ると、 れまでに見たこともない巨大さで真向 やや黄色みがかった明る か V 月 13 が、 に掛 バ つ 7 ス 0 Vi

パ A

軌 道を持つ月 が、 地球に最も近づく近地点に至っ た今日、 満月を迎えたのだ。

見えるらしい 今宵の月は、地球からは普段よりも十四パーセント大きく、 三十パーセントも明るく

ばめたような輝く照り返しをみせて、どこまでも幻想的に拡がっていた。 月は惜しみなく光を海に投げかけて、 相模湾を照らしている。 相模湾は 金粉を散

次の日、江島神社、鶴岡八幡宮に参詣し、 両の掌を合わせて祈った。 この しあわせ

がとこしえにつづきますようにと……

した。 鎌倉大仏を仰いだ。江ノ電にも乗った。 小町通りの 人込みを、

縫うようにして散策

最上級の富士の姿よりもはるかに美しい風景を脳細胞にしっかりと刻印

をかみしめることができた。

人生は旅、 旅もまた人生といえる。

二人の子供たちもそれぞれ良き伴侶を得て、 相次いで独立した。

ひとつの峠を越え、 それとも歩むように遅い 人生も下りにかかったのだ。 のだろうか。 下りは落ちるように速いのだろう

とにもかくにも、 一歩を確かめ、 歩を踏みしめて、 旅を続けねばなるまい。

旅は、 まだ終わらないのだから。

まだ、 旅を終わらせてはならない のだから…

(平成二十四年五月)

#### 司 港 ŀ 口

24

というだけの生理的現象なのだ。 させたというより、 てよいのだが、 遠足に行くように数日前から怠りなく準備を整えていたから、こんなに早く起きなく 泊のショ 明けもせぬ暗い時刻に目が開いてしまった。 トリ 早起きが既に習い性となってきたのだろう。 /ップに 出かける今日、 午前三時前に目覚めた。 待ち望んでいた旅がそう つまり、 まるで小学生が 歳をとった

なった NHKのテレビ放送は、 ひらめく日 の丸を映 して君が代を奏でたあと、 字幕だけ

め 広島駅で新幹線を降りると、 てい 口 る。 を吹き抜けてい った。 新 じい 水色の澄んだ高い空にはイワシ雲が 秋が来たことを告げる心地よ 41 涼し B V 2 駅

今回ぼくたちは、 H交通社 0 パ ツ が旅行に お世話に な 0 7 Và る。 あ 広島駅

帰り の新幹線に乗るまではバスで の移動になる。

トル」との表示があった。 を右に見ながら平和記念公園の傍を行った。 スは原爆ドー ムを左に見て太田川を渡り、 すぐまた左折。 国道に出ると 次は二股に分かれた太 『下関まで一九六キロ

平清盛が現在の規模に造営した、 ユネスコ 年というから、 の世界文化遺産に登録されて 宮島は古くから神の島として崇められていたのだ。 とパン フレットが教えてくれた。 Vi る日本三景 のひとつ の厳島神社 創建は推古元 の社殿は、 쥞

小さい子どもを連れた家族が、 ぼくたちが拝観した厳島神社は干潮時であったらし 無邪気に戯れていた。 67 潮が引いて現れ たなが に出

はない。まるで平行に整列する棚田のような光景だ。 風によって起こる波はただ寄せ来るばかりで、 己の貧弱で醜き肉体を恥ずかしく思った……。 次々 と寄せては消えてい 自然の生み出す波紋の造形美 返す波 0

ムが、 この旅の一週間前、 左右でまったく異なっ 浴室の鏡に己が全身像を映してみた。 ていることに気付い た。 からだの右側はある程度筋 肩や胸の筋肉 0) ボリ 肉量 ユ

左の胸鎖乳突筋などは、
\*\*\*うきにようとうきん
は保たれているが、左側 さらばえた幽鬼のようだ。あな恐ろし 左側はまがうかたなきサルコペニアに成り果てているではないか。 もはや糸のごとくで、 あやうく血の気が失せていきそうにな 指で摘むこともできない。 まるで痩せ っ

まったのだ。 原因は明々白々で、 ぼくはもともと肥えない体質ではあった。 運動不足以外にはありえない。 医師になって徐々に体重が 全身の筋肉が衰えこそげ落ちてし 減 り始めた。

筋力を取り戻すのだ。 た往時には、 していた。 さっそく筋トレをはじめることにした。 復興も復旧も望んではならぬ。 信じてもらえないかもしれないが、 陸上の 健康的にこの体を普通に操ることができる アスリー ぼくはウルトラマン 時代や、 のような体型を 登山に明け

と牡蠣焼の香ばしい匂いに、ゕ゙゙゙゙゚きゃき 表参道商店街を通り、 .側にある宮島ガー 集合場所の宮島桟橋をめざして歩く。 デンで地アナゴの釜めし御膳の昼食をすますと、 いやがうえにも昼食への期待感が膨らんだ。 もみじ饅頭 次 のう 0 甘 61

の国定公園を目指してバスは行った。

ね色の穂をだしたススキが、さわさわと風に揺れていた。 カルスト地形の台地に点在する石灰岩が、 秋吉台の展望塔から眺めた光景は、 ゆるやかにうねる広大な緑の海原のようだった。 海に遊ぶ白い波頭のように見えた。

大規模な鍾乳洞だ。 秋吉台とともに国の特別天然記念物になっている秋芳洞は、 何十万年もかけて形成されたという地 疑わしいような感覚に陥った。 の底の異界を歩むと、 中に川、 淹、 淵もある 今の

己の存在も不確かで、

秒にも満たない、 洞を抜けて陽の光に包まれると、 夢から覚めたような心地がした。 いものなのだ。 アチラの世界へ往って 悠久の宇宙時間 の中では、 V た魂がふと我に還ったよ 我々 の存在など一

フグ尽くしの夕餉を終えた時には、にも満たない、泡のように儚いものにまった。 既に夜のとばり が降りてい た。

お日さまマ 港駅近くのマリンゲート門司でバスを降りると、 ク の赤一色で、 い定めたように雨が落ちていた。 雨 のことなど云って いなか 今朝テレビで確かめた天気予報 思い った。 がけ 日中 ない 、雨に驚 晴天である か

はずだった。

港界隈を逍遥した。
念のために一本だけ用意してい た晴雨兼用の女性用の小さな傘を差して、 夜 0

ね返りは無い。 はみだした肩が濡れる。 潮の匂いと甘やかな雨の匂 濡れ 7 もよ V ほど Vi が嗅細胞をくすぐる。 しとやかな雨だ。 か 5 0

思い出が甦 妻が腕をからめてきた。 ってきた。 濃密な、 肌に伝わるぬくもりに誘い起こされて、 あいあい傘にぼくたちはおさまった。  $\mathcal{O}$ 

託のな ようになった行為なのだ。 人連れの若い男女が、 背中に、 恋人時代でも腕を組んだことなどはなかった。齢を重ねてきた今だからこそで い笑い ぼくたちを温かく応援してくれているような、優しい眼差しを感じた。 声を運んできた。 ぼくたちのすぐうしろを歩いていた。 何だか青春時代をやり直しているみたいだな、 「どうだい、 羨ましいだろう、 夜風がうしろの二人の屈 工  $\sim$ ン」と、 と思った。 胸を張り

月も星もな いそぼ降る 雨 0) 腕 を組 み、 門司 港の 水際を歩む中年夫婦 0

はぼくが密かに憬れていた風景だった。

きっとあるだろう。 言葉を聞かなくても伝わっ ぼくたちは魂セォ てくるものがある。 の緒で繋がって 言葉なくし いるのだ。 て伝わっ てゆ くも

**惚やかに、しめやかに、ゆっくりと時間は流れている。** 

れたという。 「ブル 福岡県で初 のぼり、 ウィ ングもじ」 そして、 めてプロ ポー という名の跳ね橋を、 ゆる ズにふさわ やかにくだった。 しい スポ この橋は全国初 ぼくたちは誇らしげに腕を組 ットとして 『恋人の の歩行者専用 に認 Ä 0) 跳 で 定定さ ね橋

焼カ に濡れ て黒 屋 の 軒 7 灯や、 ス ファ スー ル F ベニ が、 アシ 0 ∃ ように街燈やビ ツ プの 店先も雨の ル 0 窓明 なか で潤 か りを映 L で 41 Va

---階にある 門司 港レ 卜 口 展望室に 上ると、 朩 ル でジ ヤズ 0) ラ イ ブ れ 7

闇な 大窓の の底をほ ガ ラス 0 か 越 に浮かび上がらせて に 夜景を眺 めた。 Và 港や街 0) 建物が控えめ な光で瞬 VY て W 夜 0

『しらせ』が健気に停泊していた。 門司港にはその過酷な職務をねぎらうように、 艶で やかに電飾を施された南極観

投宿したのは、 IJ ーガロイヤルホテル小倉の十五階 — 五. 一五号室だ つ

焼く夏の力が残 だったのだろう。 翌日、 朝食を済ませると、 っている。 空は抜けるように青く澄んでいて、 関門トンネル人道に向か 秋の太陽が放つ光には った。 昨夜の雨 は Vi はまだ肌 つ た 14 何 を

九州と本州の間を貫く全長七八〇 メ 卜 ル の海底ト ンネルを徒歩で横断し

四国 にも砲弾を発射できそうだが、 下関側の地上に出ると、 みの地でもある。 一艦隊下関砲撃事件の舞台になった。 四門の大砲が馬関海峡めがけて並んで V プリカだということだ。 また源平の壇ノ浦 幕末には英、 の合戦では安徳天皇入水の いた。 米、 磨かれて、 仏

ン バナが、 スは川の流れに沿っ 赤く血のように燃えていた。 て山陰地方西部 12 向 か つ 7 W る。 田 ん ぼ 0 畔き ゃ 畑 0 隅 ヒ ガ

陰の 小京都とい われ ている津和野を訪れ、 森林太郎 (鷗外) 0 生家を見学した。

停車して R津和野駅のホ いた。 鉄道ファンなら垂涎の状景だろう。僥倖であった。 ] ムに、 ちょうど白い水蒸気を吐き出してSL 「やまぐち号」 が

機オスプ 山陰から山陽へと南東にむけて、 レイ問題で揺れる山口県岩国市にある、 曲がりくねった道をバスはひた走り、 錦帯橋に至った。 米軍  $\dot{o}$ 送

れた。 しい橋だ。 複雑な木組みで構築された全長一九三・三メー しばし我を忘れて見入った。 橋の欄干から身を乗り出すようにして清流、錦川に群れ躍る銀鱗の 鵜飼船がもやってあった。 トルの五連の木造の橋を渡 鮎釣りをする人も散見さ つ 煌めき 美

帰りに橋を渡るときには、 振り返ると、 山頂 の岩国城の天守閣が夕日を浴びて静かにこがね色に染まっ 太陽は背後の Ш の向こうに既に落ちて Vi て橋 は翳が つ て 7 Và Vi

本空けると新神戸駅までとろとろと眠ってしまった。 広島駅に隣接した店で、 広島焼きを堪能 して新幹線に乗っ た。 車中で缶ビ ル を

日常を逃れた二日間 の旅は終わった。 旅は Vi つも生活の Ŧ ド をリ セ ッ てく n

明日からまた、 仕事に専念しようと思う。 次の旅を、 楽しみに待ちながら……。

(平成二十四年九月)

## 南九州の旅

「雨は降る降る 人馬は濡れる 越すに越されぬ田原坂 右手に血刀 左手に手綱なったがな

馬上ゆたかな美少年

バスガイドさんが歌 い始めた。西南戦争を歌った 『田原坂』だ。

九州自動車道の熊本平野北部に位置する植木ランプを通過しようとしている。

桜島を眺めてみたい、とかねてから思い続けていた。妻も桜島を見たことがないと

いう。 南九州に行ってみよう

旧国名でいうと肥後、薩摩、 日向の国々を巡る五月の連休の旅は、 三日間ともほぼ

晴天で気温も二十数度まで上昇した。

日本三名城のひとつに挙げられる熊本城は蒼天を背景に威風堂々と聳え立っていた。目指した。このバスには専属のガイドさんが就いていた。 ○九時四○分にJR博多駅に着いて、 福岡ナン のバスに乗り換え、 まず熊本城

勾配とな 勇壮な天守閣に息を呑んだ。 精緻な石積みは上に行くに従って傾斜が垂直に近いサビホ

34

知覧に向か 2 7 バ スは行

刻み込まれて イドさんが特攻隊員の遺書を語 いるのだ。 隊員の最期の言葉が甦るようにして、 n 始めた。 朗読するの ではなく、 彼女の音声から伝わっ 全てその

とて より育て下されし母。 お元気です 慈しみ育て下されし母。 継母とはいえ、 0 長 13 あ Vi だ、 ありがたい母。 世のこの種の女にあるごとき不祥事は一 本当にあり がとうございました。 尊い母。 俺は幸福だった。 わ 度たり 0

なんと意志薄弱な俺だったろう。 2 いに最後まで、 お母さん、 と呼ばざり 11 く度か思いきって呼ばんとしたが

第七十七振武隊、 お母さん、 お許しください。さぞ、 相花信夫少尉の遺書である。 お母さん 淋ざ しか お母さん、 つ たでし ٥....ع うよう。 今こそ、 大声 で、

齢わずかに十八歳だっ

イドさんは歌もたくさん歌ってくれた。

じ」万葉集の大伴家持の長歌の一節だ。 「海行かば水漬く屍 山行かば草生す屍 0 辺にこそ死なめ か ^ り見は せ

ちのめされ 旅の前には知覧特攻平和記念館を訪ねるつもりだった。 てしまった。 ガイドさん の語る言葉に 打

ことになりそうだ。 と感じた。 このまま会館に足を踏み入れたなら……、 ぼくはとんでも Vi

遺影を目の当たりにしたとたん、 には二百十 沖縄の、 四柱の犠牲者の遺影が並んでいた。 ひめゆり平和 祈念館を訪れた時もそうだった。 滂沱の涙が溢れて止まなかった。 戦乱に挺身し散って 「鎮魂」 0) VΣ 部 った乙女たちの 屋の三面  $\mathcal{O}$ 

なるのは必定だろう。 今回もタオル地のハンカチは用意しているが、 とてもそれでは間に合わない

そうい 武家屋敷を散策すると決め う訳で、 妻とともに武家屋敷庭園群を逍遥した。 て Vi 選択ができるの

月を経て 知覧は薩摩の小京都と呼ばれ、 歴史の息吹を今に伝えて 母ヶ岳 いた。 の優美な姿を借景として二百六十余年も

あっ んだようだ。 込まれたイヌ 屋敷群 維持管理し 0 地区内は ハマキの 人手が てい 生垣の見事さに思わずため息が出た。 石垣で屋敷が区切られ 加えられた芸術的な庭園美には、 く大変さを思うと頭が下がっ 折 n 曲が た。 った通り 自然 水墨画 の美しさを凌駕する力が ŋ 0 石垣 の中の世界に迷 13

月に公開された映画、 平和記 が歌う 念館には入場しなかったもの 「永遠の翼」が主題歌だった。 の実物大の精巧なレプリカが屋外に展示されてい 「俺は、 君のためにこそ死にに Ó, その周囲を巡 い く く つ の撮影に使われたものだ。 た。 特 た。 攻機 二〇〇七年五 0 ひ

溢する哀切な想いに胸が熱くなる。 じて、 の中に見つけた。 て今日 愛しい の平和に浴すことが赦されているのだ。 ほど美しく、 憂愁の言葉はひとつもな それでい わたしたちは、 て 爽さ P V かな遺書を知覧平和記 これらの その ためか、 感謝せずにはおれな 人びとの崇高で透明な魂 かえっ 念館 て行間 0

ジより引用する。

そうだ して夏を思わせる あんまり緑が美し 一六五振武隊。 真っ青な空 第一六五振武隊長とし 作戦命令を待ってい 11 (£ かんと浮かぶ 今日これから 大尉、 二十二歲。 て指揮をと る間 雲 死ににいくことすら った。 六 富 月の 山県出身。 知覧は 次の詩を残して 早稲田大学 もう蝉 忘れて

本日十三時三十五分 慣れた万年筆を形見に送ります 0 声が楽しそう 杉本がこんなことを云ってい 「俺も今度は小鳥になるよ」 11 よいよ知覧を離陸する る 笑わせるな 懐 日 か 0 当たる草 0 玉

最大 からぼくたちは、 0 0 池 田湖をバ 坂を下りて薩摩半島最南端の長崎鼻に向かう。 ス の右窓に見た。 大ウナギが棲 W で V

標高九二四メ 視界が開けてきた。 トル の開聞岳である 富士山のような整った山容の美しい 円錐形の薩摩富士があ

知覧を離陸 これが最後と眺め、 した特攻隊員たちは、 万感の思いで家族への永訣の礼を捧げたに違い 母ヶ岳を真正 面に見て超え、 次 V で 0

この先に陸はない。 ただ、 広漠たる海原だけがあった そして二度と故郷 0

を踏むことはなかった……。

夫婦ふたりとも、良い笑顔で写っ 長崎鼻に至った。 添乗員さんにお願 ていた。 13 て、 開聞岳を背景に写真を撮っ

指宿での砂蒸し温泉は妻だけが楽しんだ。シュマトット

という。洒落であろう。 夫婦箸を土産に買った。 屋久杉を材料とした民芸品を扱う工房で、 高価なものだったが、 娘夫婦、 お守りだと思って求めた。 息子夫婦の夫婦円満を 厄が過ぐ、

店の前に国道があり、 堤防の向こうには鹿児島湾に浮か よく目を凝らさないと空と山の端との境界がわかりに び立つように桜島が見える。

な噴煙をあげた。桜島は感動をくれる山ではなかった……。 それでも噴き上がる白い煙は見えた。 時折、 爆発したらしく天に届か んば か りの長大

ホテル京セラが今宵の宿だ。 夕、 朝食は『夢の 国 にて摂った。

三日目、 隼人東で東九州自動車道に乗った。

も特攻に赴き散華した若者たちが多数いたことを忘れてはならない。 宮崎県都城市にある霧島酒造の焼酎蔵を見学、 酔うほどに試飲を重ねた。

堀切峠から日南海岸を眺めた。

詣でた。 に神話を語ってくれたが、 鵜戸神宮に向かう車内で、 その内容は忘れてしまった。 ガイド さんが分かりやすい 大きな洞窟 現代語で、 噛か の中にある本殿に んで含め

青島神社にも参詣 鬼の

熊本県人吉市にある国宝、 青井阿蘇神社は蒼枯とした佇ままいまで、たずまれませんだ。 いだ った。

ばめ三六二号に乗車した。 新玉名駅に着いてバスを降りると、 博多駅までたった約四十分の短い乗車ではあったが、 自分の影が吃驚するくらい長く伸び

新幹線は快適だった。

子なら、 望んでみたいと思った。 機会があれば、今度は自分の足で開聞岳に登り、そこから夕陽に照らされた桜島を 知覧特攻平和館には覚悟して訪問せねばならないだろう 桜島からは、 まだ感動をもらっていない。そして、大和男の

(平成二十五年五月)

## ードに乗って

た。 約束のふたりが、 ○九時三十九分にJR京都駅で乗車してきて、ぼくたちと合流し

出た。 した。 特急サンダーバードに乗って、 大阪駅○九時十二分発のサンダーバード九号だ。 十一月初めの連休に信州の紅葉を愛でる一泊の旅に ぼくたち夫婦は大阪駅で乗車

### 『妊娠してたよ』

とうと、 念を押した。 結婚して一年半になる娘からのメー 祝い の言葉を送った。大切な命を預かった躰なのだから、 ルがあったのは二日前だった。 自愛するようにと さっそくおめで

# 強い母親になれるように頑張ります

週間ごとに経過をみていくようだ。 妻に告げて、 ふたりで大笑いした。 涙がこぼれた。 まだ胎嚢も見えてい な 5 11

提案に、娘は肯んじなかった。 かったのだ。 半年ほど前、 娘の一歳年上のいとこが母になったので、お祝いに行こうという妻の 行くのが辛い、と云った。 何しろ正常な月経さえな

第に薄れていき、仄かな希望の光を見つけていったようだ。 くの女性が通っていて、それに勇気づけられて投げやりになりそうな暗い 娘は不妊治療専門の病院に、 約一年間通院していた。 外来には同じような境遇の多 気持ちが次

検査してみます、と言った。 娠検査をしてみたところ、うっすらと陽性反応が出たというのだ。 どうやら懐妊したらしいと、妻に電話で知らせてきた。 町の薬局で買っ 次は一 週間後に再 た試薬で妊

ところが娘は連日のように検査を繰り返した。 判定ライ ン が次第に濃 吹くなっ て

たのだろう。 のを確かめては、 なんとも 疑い から、 いじらしく、 たぶん陽性、 愛しい行為である。 さらには間違い ないと、 歓びを高めて つ

でしょうと返信した。 検査結果を示す写真を送ってきたので、 インフルエンザの検査なら間違 V

色に染まり始めていた。 神戸の自宅を出た時には天は晴れていて、 正式に医師に受胎を告げられて、 悦が 公園の桜の葉が、 のメ ールを寄越してくれたのだ 桜桃の佐藤錦 のような つ

低気圧が東に去り、 金沢駅に降り立つと、 西から大陸の高気圧が張り出して、 街はどんよりとした鈍色の雲に覆われて小雨が降 日本列島は冬型 の気圧配置に 0

車体や窓をたたき付けた。 親不知、子不知を通過するころには、まいらず、こしらず トンネルを抜けるたびに、 篠山 つく雨 が バ ス 0

は行けない 戸隠高原の麓にバスは停車した。 ので、 タクシ に乗り換えて向か 雨は止ん った。 で W た。 日陰になって 目指す場所には道が V る道端には、 雪が スで

残っていた。運んでくれたタクシーの運転手さんが、今日の明け方に降ったのです、 と教えてくれた。もうすぐこの地方は雪に閉ざされてしまうのだろう。

鏡池から眺めた光景には魂が揺さぶられるほどの感動をおぼえた。

をひとつずつ分割して照らし出す。まるで、詳しくここを観よ、とでもいうように した太陽のひかりがスポットライトを当てるように、次々と遠くの岩肌や目の前の林 峻 嶮な鋸歯状の戸隠山の稜線は雪を纏っていて既に冬の装いだ。雲の合間から射いタヘウナヘ \*\*ピレピッラ ザク サスト \*ピ

神々しい光景に恍惚となり、夢か幻を見ているような心地になった。

山稜の南東に広がる広葉樹林が黄色に染まっていた。鏡池の面には強い風によれたのよう 文字通り鏡となって美しい景色を見せるらしい。 る

熱が奪われた耳介や鼻先は痛いほどだ。風花が数片舞い降りてきた……。 それに薄手のダウンコートまで着込んでポケットに手を突っ込んでいるのだが 吹き降ろしてきた風は身を切るほどに冷たい。長袖のポロ、毛糸の吹き降ろしてきた風は身を切るほどに冷たい。長続で カー ・ディ ガ

戸隠神社の中社に詣でた時には既に陽は落ちかかっていた。 樹齢八百年を越えると

聞こえた。 いう杉木立に囲まれた神域は神韻 縹 渺たる奇しき静寂に包まれていた。 嫋嫋と聞こえてきた。 自然と背筋が伸びた。 森自体が神なのである。 遠くから寺の梵鐘の低い 自分の跫が

安産守を一体授かって娘夫婦に与えた。

高高原温泉郷にあるリゾートホテル、妙高パインバレーに向か 森らしい。 街燈ひとつない闇 しかも黒 い森。 の中の曲がりくねった道をバスは昇った。 何物も見えない……。 人家の って V . る。 火影もない 道の )周りは V

光をうけて、 妙高山 いうちに目覚めて、 の連峰が既にオレンジ色に染まり始めてい モルゲンローテに輝くのだ。地上はまだ暗い ホテルの前庭に出た。 人里と隔絶されたホテル た。 高い 闇 の つ中に眠 Ш の頂 いってい のみが朝一 の背後を た。

今日は二つの紅葉名所の滝を巡る。

13 ホテルから町に出 昨夜の黒 森はカラマ る道には、 ツの森だったのだ。 風に吹き寄せられ たカラマ ツの落ち葉が 降り積も つ 7

りて、 今日もタクシ で移動した。 ぼくたちは今、 渓谷 この底に Vi て、 苗なる

滝に向おうとし ている。渓流に沿った樹林の中の小径を登 一った。

46

運んできた。今、足元にあるのは朴葉だと、 ほどに、 は昨日の雨を排水しきれず、 おとなの手のひら二枚分はありそうな大きな朽葉が落葉して積み重なって 芳わしい焼き味噌と淡麗な大吟醸を連想させる馥郁たる香りが鼻腔に幸せをゕ゚゚ 泥濘になっている。 歩みながら確信した。 湿った亜麻色の落ち葉を踏みしめる V 道

何度も嘆息した。 道 「々、綾なる錦を纏った対岸の急峻な山肌の秋色を眺めた。 青空は高く大きく、 どこまでも澄み渡っていた。 その 艶を ゃ か な美しさに

た 苗名滝は黒姫山と妙高 山 の間にあった。 幅広で真っ白な、 晒し木綿 0 布 引 Ö 滝だ 9

年が明けたら岩田帯の 祝 13 が待っ ている……。

光寺に詣でた。 記念撮影の 七五三参りの多くの稚児とその両親、 カメラに向かってみせる笑顔は、 皆幸せそうだ さらにはそ 0 祖 父母 でに つ

ぼくたちも爺婆になればこういう愉しみが待っ ているのだと知った。

善光寺は檀家を持たな らし 61 参詣する人 の浄財で維持され てい る 0 でどうか

布施を、 と勧めら れた。

わけではない 娘たち夫婦は、 が、 娘の安産祈願の意味もこめて喜捨した。 すがる思いで安産を願ったようだ。 本当に霊験があると信じて 14

る。 足許を確かめながらゆっくりと下った。 次は、 落下した水は直ちに清冽な渓流となって川を下る。 深い やっと轟音を発して 松川渓谷へと降りてゆき、 いる雷滝を真正面に眺めた。 冷たい 雷滝に向かう。 雫が滴下するオー す まさに雷 れ 違 V バ も困 のような瀑布であ 難 ハ 、ングの嚴の な狭 V の下

思えないほど幻想的だった。 していた。 の西の海に沈みそうになっ 高速道路を行く、 柔和なプラチナの 帰路 のバ ような輝きを見せるススキの群れ スの車窓から眺めたススキの群生が ている太陽が、 ススキの広大な原を低 は、 節 象的 ح Và の世 角度で遍く照ら だ のものとは った。 H 本

さっそく缶ビ 復路に乗車したのは、 娘夫婦と喜びを共有することもできて、 ル (を開けて富山駅で買った白エビの蒲鉾を肴に、)は、富山駅十七時五十六分発のサンダーバード - 六分発の 決し て忘れることのない ド 旅 四十二号だった。 旅となっ 0 の余情に浸 2

白く生きるために次は何ができるだろうか、 人生という旅は誠に面白い、 と最近しみじみと思えるようになってきた。 などと考えながら信州行を終えた。 もっと面

(平成二十四年十一月)

## 光の中

まん丸こい小さな生き物が、 くまモンに似ている、 と私は思う。 今、 私たちの家にいる。 クレヨンしんちゃ んに似ているわ、 と妻は言う。

季節は夏

連日熱帯夜が続き、 通勤途上の街路樹からはジージー、 シャーシャーという蝉時雨

が降り注いでいる。

ずに大声を出すので、泣いているのではなく、 ヵ月が過ぎて、 の生き物は切ない哀愁を帯びた大きな声で、 体重は出生時の一倍半を超え、 私たちを誘っているのかもしれない。 類っぺに力が漲 オー、 ってきた。 と泣く。 涙も出さ

## やさしく抱っこして。 やさしく揺らして。

この子は、

全身全霊で泣く。

渾身の力を込めて泣く。

間違いなくヒトの声で泣く。

49

攪くように動かす。 がらなけ . の腕 ればならぬ、 ただもう闇雲に、 暗く深い湖の底から、 とでもいうように。 無目的に、 早く明るい太陽の光が射す 左右非対称に、 グワラリ、 湖面 グワラリ へ浮か びあ

かたまりのような必死さをみると、 両下肢は、 岩も砕けよ、地も裂けよ、 鬼気迫るものがある とば かりに激 しくキ ツ クを繰り 返す。 情念 0

くということはしない。 泣く、 というひとつの行為を、 ただ真っ直ぐに、 所懸命に泣く · の で 、ある。

空腹であれば泣くのは当然だが、 この子を抱っこして泣き止む時もあれば、 満腹でも泣く。 V くらあ Ŕ しても泣き続け る時

んにとって、 察するに、 飲んで、 全身の筋肉を総動員し、余すところなく使って筋力を鍛えて 務めのようなものなのだ。 眠って、 ただ出すだけでは筋肉は生育しない から、 泣くことは赤ちゃ 13 る の で あ

た。 私の第 日齢八に母とともに実家にやってきた。 一子の娘が生んだ嬰児は、 在胎三十七週六日、 その男の子 0 出 顔は、 生体重二二八〇 翁のような皺が額に グラ ムだっ

尖がり、 あっ 高貴な雰囲気があった。 しわくちゃだった。 が、 眼を開い た顔は織田信長の肖像画に似て 面長が でぉ 頭がが

時々あっ 母 乳は た。 溢れれ るほどに出るらしい。 その子は飲み初めに溺れるようにむせることが

我が子の養育時代には感じたことがなかったものだ。 心に吸啜していた。 いほど衝き上げられ、 それにしても、 子は母のふくらみを絶対的な安心感の海をたゆたい この子は 孫の、 愛の芽を芽吹かせる力を生まれながらにして持って 命をはぐくむ源であり、 涙が溢れそうになる。 このか わいさは何であろう。 こんな感情に染められる 拠りどころであるありがたい 云いようのない なが 36, 息をする 愛しさに胸が痛 いる のは 0 初めて も忘れ のだろうか。 ふくらみを。 て

多くの人々の、 光のような哀しい 愛情に包まれて、 まっ たく無防備で Vi 6 ħ えるこの

なのだな、と生後九ヵ月にしてやっと思えるようになったのだった。 付けて、 玄関先までタッタ ッタと、 心に這は Vi でやっ てきた。 わ V 1,

さずにいたのだろうかと。大変な罪悪感を覚えた。 あの頃……、と不意に思った。 私は生まれて九ヵ月も過ぎるまで、 己のこどもを愛

がら慚愧の念が湧いてくる。 く帰宅することを常としていた。今から考えれば信じられないことであり、 そういえば、 大学院時代にはこども達が寝静まった頃をみは か 5 って、

がってきた。 お っこをしたので、 いね とい おむつを替えてもらっ いながら抱っこしていると何だか温泉のような匂いが立ち上 たこの子は 心地よさそうに て

の悲鳴があった。 と娘がおむつを開いたとたん、ブリリッ さっきおしっこで替えたばかりなの 薄黄色の卵サンドの中 に、 -味が またウン ーメー 一瞬の出来事だった。 チ ルあまりも飛び散った。 それ では替え キャ ましょ 威風

堂々たる遠慮のない放出だった。

て満足げに頬っぺを膨らませていた。 優しく彼を包んでいた。 事を成し遂げた彼は、真夏の夕暮れ 和室の明かり障子からの柔らかな乳白色の光が、 の微風を全身にうけ、 天真爛 漫れ の涼

# ゆったりとしたお風呂が好き

する。 をあげて、 は V はい 0 沈む前の陽の光を取り入れると、 ゆ つ りとお湯につ かりましょうね、 そこはエルミタージュ と沐浴をする。 浴室の の温泉に早変わ ブラ F

したくちびるは桜の花弁のようだ。 ぼくは今最高に幸せです、 というメ 私たちもこの子と同じ幸せに浴す相伴を得た。 ッセージを全身で表現し Ē 41 る。 ツ

静かな喜び が湯 の中に溶け出て溢れてくる。 悦びはさらに拡散 してこの小宇宙を満

たしていく。

#### ぼく の名前 は、 理生です。

54

レで、 しい一光景として写真に収めた。 が再会した。 それを眺めて 初宮参りという前日に理生の父さんが母子を迎えに来て、 さっそく我が子を抱いた理生の父さんは、 いる理生の母さんの慈愛に満ちた眼差しには温もりがあっ もう、 くにや 一週間ぶ くにゃのデレデ りに父子

華でありながら落ち着いた趣のあるもので、 が代表して玉串を奉奠した。 た。 翌日、 っぱな社だった。 1/2 嫁ぎ先の意向で日齢二十七に京都の松尾大社に詣でた。 に贈った一つ身は、 神職が厳かに祝詞をあげ、私たちはお祓いを受けた。 そのあと、 金糸、 銀糸をふんだんに使い、 巫女が左手に鈴、 眩しく晴れがましい理生によく似合って 右手に幣を持っ 絞り染めを多用した、 大社 は古色蒼紅 父方の祖母 て舞った。 たる

13 子にしてい 理生が記念撮影をする間もずっとおとなしく、 たのには驚かされた。 こんなに長時間泣かずに眠って 弥勒菩薩のような安らか いるのは珍しいこ な寝顔

となのだ。 夢をみていたとすれば、 きっと前世 0 Vi い夢だったのだろう。

から光をもらって、 私たち夫婦にとって、この子はまさしく光そのものだ、と思う。 今しばらく人生を同道させてもらおうと思う。 私たちは、 この子

し、一週間後にまた我が家にやってくる予定だ。 大社の鳥居のところで別れた。 理生は父母と一週間、 新築したばかり の自宅で過ご

ざいました』とメールがあった。 『お父さん、お母さんも一緒にお参りできてよかったです。 あ ŋ がとうご

溜りもできていて、 体を輝かせていた。 植栽や道路が雨に洗われ 樹木に付いた水滴が煌めき、 ていた。 薄い雲を透して射す太陽の光が こちらは大雨が降 った らし )町全 水学

を吸ってから、 週間後里帰りする予定の、 自宅 への道を歩み始めた。 光その もの 0) 理生のことを想 14 私は、 度大きく息

(平成二十五年七月)

#### 飛 解高 Щ

木も暖かな春の光を豊かに浴びて爛漫の季節のただ中にあった。心待ちにしていた高山祭が催される日の朝を迎えた。自宅の宮 自宅の庭に出 てみると、

り積もった。 二日前の四月十二日には、 高山 は氷点下一度の最低気温を記録 桜 の蕾に 雪が

ドライバ 往復行程約八百 ーもふたり乗車 キ 口 メ して いる。 ル 9 日帰り旅行 は、 *7*1 なもの になりそうだ。 バ ス  $\mathcal{O}$ 

今日一日ぼ うくは、 遠足に行く少年になろう、 と思 つ て V る。

みが画し ンク色が生き生きとした命の輝きを感じさせてくれる スの車窓からの景色を、 てい る。耕された段々畑の土色や、 心をまっさらに Ш つつじの鮮やかな赤紫、 て眺めた。 水色 の天を青灰白色 山桜 0) 淡 0 Щ

広大な畑をトラクタ がかき混ぜると、 土の色が黄土色から茶褐色にさっ と変わる。

すこし黴臭い土 の 句は いを嗅いだ気になる。

頂に雪を残した伊 吹山がみえた。

東海北陸自動車道は空いていた。

山の ずズボン ながらポ 標高八七四メートルの、 威容に目を瞠目 のポケットに手を突っ込んだ。 ルと垂直になって泳いでいた。 った。 鯉のぼりが強風を呑み込んで、 ひるがの高原サ 展望台から眺 ービスエリアで休憩 めた標高二七〇二メ バタバタと大きな音をたて じた。 寒 Vi 思わ

ギアを一 段落とした車両番号三三五八の バ スは、 W ん高度を稼 14 だ。

が残っていて、 返された。 ンネル が続いた。 トンネル 量的にもかなり多いことに驚い な全部 トンネルを抜けると高架橋、 で五十四本もあるらし た。 V 0 高架橋を渡るとト 高速道の隅や、 すぐ隣 -ンネル 0) 繰 ŋ

〇五〇 X 0 の表示があ った。

であと十五キ 飛騨清美ジ ヤ ン シ ルだ。  $\exists$ ンで高速道を降り、 国道一 五八号線をバ ス は 13 つ た。 高 Ш

口

X

Vi ったところだった。 飛騨高山では木蓮の花が今を盛りと咲き誇ってい 神戸と比べると二週間ほど遅い春だ。 た。 押し並べて、 三分咲きと

格子が連なり、 歴史が降り積もっている、と思った。 本の原風景を感じさせる町並みが美しかった。 碁盤目状の まるで京都の町屋のようだ。 「古い町並」と呼ばれる三筋のうちの一筋を南から北 筋の両側に清らかな水路が伸びている。 江戸時代にタイムスリップしたかのような、 この町では歴史は流れ去って 建物は皆、 狭い へと散策した。 間口で奥行き V な 出で

し子のコースターを六枚買った。 軒の店に誘われて足を踏み入れた。 この店で懐かしさを感じさせる、 藍いいる 0

る宮川 「橋の中の橋」という意味を持つ中橋を渡った。 ひとつ西の筋を南行して、 の川面を眺めると、赤や黒の丸々と肥った数多の錦鯉が悠揚と泳いか。 からくり奉納が披露されるお旅所 朱色に染められた欄干から下を流 前広場に でいた。 n

山陣屋と道一本隔てた広場には、 っていた。 少しでも雨が降ると屋台は出ない 国の重要有形文化 財の十二台の屋台のうち 几

ろう。 大群衆の中に、 てきている 本三大美祭のひとつに讃えられる春の高山祭、 この祭りを観んがために全国の津々浦々から、 のである。 揉まれるようにしてわたしたちはいる。 「山王祭」を見物しようと集った そして世界中から人びとが訪れ なんと華やいだ賑賑しさであ

山王祭は日枝神社 「山王様) の例祭で、 山王様は旧高 山 城下 町 の南半分の氏神

金色燦然と輝 く荘厳な飾りつけの神楽台は演技をしな

簡略な説明がなされた。 それぞれ のからくり演技の前にスピーカー 人形のことを英語ではマリオネットと表現していた。 から英語で解説があり、 次い で日本語 で

場全体が緊張に包まれ、 見事に変身を成し遂げた。 てはにかむような口元と、 まず三番叟の演技から始まった。 9 て いる。 クライ 観て 涼しげな双眸の童がゆったりと華麗に舞う。 13 マ る皆が成功を願 ック スは童が白眉白髭の翁に早変わりする場面だ。 「浦島」の雅やかな旋律に合わせ、 0 た。 失敗することもあるらし 白い歯 右手に鈴、 [を見せ 左

荒々しく怒り舞った。おおーと、 は撞木をかざして右に左にグルグルグルッと激しく回転し、 起った。 ったとたん壺が開き、 次は龍神台の演舞だ。 壺に入れて捨てられた大酒飲みは実は龍だった。 唐子が逃げ 中からその倍ほどの大きさの龍神が勢いよく現われた。 大観衆が喚声をあげた。 と同時に万雷の拍手が湧き 紙吹雪を散らしながら

ら獅子頭が出て舞うという思いもよらない発想のからくりだった。 の花を持ち優雅に踊った。 ことを単にライオンと表現していた。 最後は石橋台が演じた。 妖艶な美女が踊 獅子から元の姿に戻ると、 っているうちに絢爛な襠 右手に赤、 英語では獅子頭の くれ 左手に白 か

全ての演舞が終わった。舞い終えた三台のマリオネ 皆誇らしげで、満足そうな表情を湛えていた。 は澄み渡る春風を全身に受

空を見上げると子羊のような雲が次々と駆けていくのが見えた。

ることにして地図を妻に渡した。 妻は祭行列の御巡幸を見学するという。ぼくは足腰が痛くなったので先にバスに戻 祭広場の前の道を南に行って西に行き、

場がある。 て歩けば 「眼鏡市場」があるはずだ。 そこを右に曲がればほどなくバ スが待 つ駐

祭帰りの地元の人らしき中年夫婦に、 V 気が付くと記憶にない景色ばかり るの かも判らなくなっていた。 焦ったー JR高山駅にはどう行けばよいですか、 が続く。 おか 0 んいぞ、 駐車場の名前も思い出せない。 と思った時 自分

の信号を左に曲がればあとは看板が教えてくれます」

のように打ち、 うな冷たい汗が滲んできた。 「確か三つ目 南に来過ぎていたのだ。 喘ぐような呼吸になった。 北向きに逆戻りする。 集合の午後四時三十分に間に合うだろうか。 歩を急がせた。全身に鳥肌が立 心臓が早鐘

な時に限って信号と信号との距離が異様に長い

あそこを右折すれば駐車場はもうすぐだ。 三つ目の 信号を左折すると見覚えのある通りに出た。 服鏡 市場」 が見えてきた。

角を右に曲が った。 駐車場があった。 出発の五分前になってい た。 三三五八、

うかー 五八……、 0 いない でも、もうそんな時間はない……。震える手で妻に電話した。 - 。 駐車場が違うのか…… 。 もう少し先の駐車場まで行ってみよ

62

『バスから向かいに茶色い建物が見える駐車場よ』

いると、バスを降りた妻が「こっち」と掌で招いていた……。 なんだ、ここでよいのではないか。 もう一度三三五八、三三五八……、 と探索して

として思い出せるような気がするのである。 小さなトラブルがある方がおもしろい。あの時は心配したけれど 今回の旅で最も心に刻まれたのは、 大迷いに迷ったことだ。旅は苦痛でない程度 と後々笑い話 0)

今日一日、 ぼくは、 確かに少年だった……。

(平成二十五年四月)

## めてのヴィ

### 岩本理生

ぼくは眩しくて思わず目を細めてしまった。 清らかな光が、 柔らかに差し込んでいる。遮光カーテンを母さんが開けたのだ。

美しく新しい朝がきたのだ……。

部屋の、 はめ殺しの大窓はうっすらと結露していた。 外の空気はかなり冷えて Vz

のだろう。 目の前には河口湖……。 十月の連休をぼくは 河口湖畔の宿 その上に覆いかぶさるように、 「うぶや」 で過ごしている。 とてつもなく高く大きな山 二連泊しているのだ。

富士山だ。

真正面に見えた。

父母や爺婆が憧れていた富士山だ。 しく聳え立っていた。 ぼくにとっては 初めての富士山だ。 々

真っ青な秋空 天晴に晴れ渡った一点の曇りもない

0 ぼくの住む京都、 桂より高い空だ。

富士山はその裾野を全方向に拡げて、 圧倒的な存在感を示し 7 14

ぼくは今、 父母と、 爺婆との初めての旅の途上にいる。

爺婆が朝食を終えて、 ぼくの面倒をみてくれるあいだに、 父母は朝食を摂 った。

支えてい 爺に至近距離で写真を撮られた。 爺はA4サイズの大伸ばしにして部屋に飾ってい る姿だ。だからぼくは輻輳反射のために「寄り目」 ぼくがうつ伏せになって両腕で一生懸命に上体を . る。 の顔で写 眺めるたびに涙が出そ って いる。

うになるらしい。笑いとともに……。

ことだけはぼくの魂がぼくに教えてくれている。 の中には蟲がいる。 これは確実なことだ。 よく はわからな W け n

くは時々狂うことがある。 突然、 ぼくの躰の 中 Ó 毛細血管の 中 に、 0)

ゾモゾ、 ちろん指先までもが……。 まってしまう。 モワーッと湧いてくるのだ。 ぼくの躰の中を流れる血液が ぼくは何が何だか分からなくなっ いっせい にいたる所で沸騰し始め て、 13 が

ぼくはたぶん、獣のような声で吼えるように啼泣してい 全身が痙攣するように無目的に動く。手も足も、 くちゃに動かしているに違いない。 あらゆるものを引っ る のだろう。 がそ 剥がすよう ŋ

太古から生き続けている蟲が、甦って、 優しく温かい母さん と問われたなら、 の腕と胸の愛情に包まれて、 ちょっと違う。説明は難しい。 ぼくの前にやって来るとしか言いようが ぼくは本来のぼくにもどる。 ぼく 0 DNAに刻まれた

には蟲の記憶はなくなっている

り注いでくれている。 父さんの運転で、 お日さまがニコニコとぼくたちに微笑んで、 恋人たちの聖地と名付けられた路にそって植えてある色とりどりのコスモスがきれ 河口湖畔のオルゴールの森美術館にやって来た。 だから、ぼくは素直で満ち足りた気持ちになれた。 暖かい光の粒子をぼくたち な

いだ。

と返した。 人々の頬を撫でている。 向こうの山を越え、 河口湖を渡ってきた涼しく青い秋風が、 風がぼくにこんにちは、 と言ってくれた。 ぼくとぼくを取り巻く ぼくもこんにちは

こんなに幸せで安息に満ちたところにいるのに、 おしゃべりをしているような、 モワーッと… さざ波だった河口湖の水面の煌めきが美し またもや蟲がやってきた。 モゾモ

まっていた……。 ようにと、 父さんが大変だったらしい。 あちこちをウロウロとしてあやしてくれたのだ。 気が付くと、 躰のあちこちの筋肉が痛くなっていた。 狂ったぼくを抱っこして周りのひとの迷惑にならな ぼくの記憶は途絶えてし

えた。 **饒 倖であった、** こんな幸福は、 いつも、 と爺が言った。 いつも、 この富士山麓の地でも、 どこでも、道路上のどんなところにいても、 なかなか味わうことはできないらしい。 富士山

訪れた忍野八海の鏡池は、 どこまでも透明で、 吸い 込まれ てしまいそうな感じが

うな気がした。 水の中に入ったなら、 池の中の虹鱒のように、 ぼくもすい すいと自由に泳げるよ

三日目の朝、 朝食をすませた爺婆と父母は、 もう満腹で苦しそうだ。 食べ n

ほどの充実した朝食だったらしい 母さんはぼくをエスティマの二列目の定位置であるベビー シ に乗せてく

ぼくは今、幸せを感じている。

人生という冒険の旅の第一歩を踏み出

ジェム……。

「旅」という言葉だ。ブラジル リオとくれば、 誰もが今度オリンピッ の語でこうい クが開催されるリオデジャネイロを思い うのだ。 ぼくはこの響きが好きだ。

だからこの語を使ってみたのさ。

ぼくの名前は 「理生」。

う名前には、 「理」という字には、 「道義を正しく生きていって欲しい」という父母の 「人の従うべき道」という意味があるらしい。 瀬い だから理生とい が込められて

るのだろう。

くは夢と希望を持ち続けて、 長い人生の旅の途中には、 人生の荒波を乗り切っていこうと思っている。 哀しいことや苦しいことがあるかもしれない。 だけどぼ

68

爺婆も控えていて、 ぼくの「ヴィアージェム」 寄り添っていてくれそうだ。 を応援してくれるのはもちろん父母だろう。 その後ろに

どんなことがあっても決してくじけることなく旅をしていこうと、 今、 決意したの

今はこんなに小さくて、 何にも出来ない ぼくだけれど……。

ぼくはもうすぐ生後四ヵ月になる……。

(平成二十五年十月)

### 螺旋階段

その日は薄雲がかかった、 うららかに晴れた日だった。

風は無く、 宿「まつさき」 の庭園の巨きな鯉のぼりはだらりと垂れ下がり、 そよと

も動いていなかった。

入無用という合図だと気が付いた。 のように太い紐で十字に結ばれて置かれていた。 前庭の池のまわりの遊歩道を廻った。 しばらく考えて、結ばれた紐は十字を示すのではなく×印であり、 大きな丸い石が二つ、 不可思議な造形を一瞬、 ちょうど薩摩藩の定紋 この先には進 訝しく思っ

池に降り注ぐ太陽の光を反射して煌めく水面を、 ミズスマシが悠揚と滑走していた。

水の中の鯉たちもゆったりと遊泳している。

る若葉の馨しい匂 大きく息を吸い込むと、 いを嗅ぐと、今日は一日 清がすが しい朝の空気がぼくの 14 ٧× 日になりそうな気がしてきた。 胸の 中に満ちてきた。 萌<sup>も</sup> 41

かに花のような香りもした。 朝食には百パーセントのリンゴ果汁が添えられて がめて も忘れてストローから溢れくるリンゴ果汁を咽を鳴らして嚥下した。 の体験だった。 ちょ つ ぴり酸っぱく、 甘いというのではなく甘やかで、 いた。 ぼくは眼を見開いて息をす こころ戦慄

えてくれた。 ぼくのあまりにも悦びに溢れた飲み様に感激した父さん は、 自分 0) 分ま で

垂直に設置されて あちらへと水平に移動することになる。 のである。 ここに一枚 階段の写真だ。 即ち階段を移動する人物はあちらからこちら、 いるのではなく、九十度ひ の写真がある。 上り下りをする螺旋階段ではない。 金沢市にある二十 っくり返して、 一世紀美術館内で母が 水平レ 重力に抗 ある ~ V は、 ルで螺旋として して上下 こちらから 撮っ つまり

は父さんに大きくかかえ挙げられ、 41 ちば ん奥の階段に 41 る。 父さん は万歳を

に覗かせている。 したような格好でぼくを持ち上げて、 をピースマークにして、 の大きさで写っている。 向かって右の端の方で婆が左手でハーイとポーズをとって中くらい 幸せそうに笑っている。 さらに手前には螺旋の左寄りに大きく写った爺が 右腕とぼくの躰との隙間 から右眼だけをかすか Vi

爺は言う。 精を出して働い 人の人生は、この螺旋階段のようなものなのだと。 ても、 一日に移動できる螺旋はただ一回転 のみなのだ。 ぼ N Þ りと過ご 7

旋しか経験してい 爺はおよそ二万一千二百螺旋、 生きてい る。 ない。 螺旋の隔たりは感じない。 それでも今、 五十八年ほど生きてきたと云う。 ぼくと父母と爺婆は、 ぼくたちは同じ位相 同じ時間と同じ空間を共 ぼくはまだ三百 の螺旋にい

館内のカフ 工 で休憩した。

ぎ見て 解な試問に合格したような気がして嬉しくなった。 父さんがぼく 「どうだい、 の顔に被せたお できているだろう」と笑ってみせた。 しぼりを、 ぼ くは余裕をも ぼくは誇らしげに父さん つ て剥ぎ取 父さんは大きく首肯 った。 . の顔 ぼ を仰 7

ニッコリと微笑み、ぼくの頭を優しく撫でてくれた。

れない つ 兼六園を散 てくる 眠たさに抗しがたくな 策した。 日差しは やわらかく、 うた。 ひょっとすると、 ず っと機嫌よくできて ずい分眠って いたも 41 たの 0 0 か

ルカ べさせてくれた。 昼食は、 ッター を持参するのを忘れていて、こまかく砕くことに難渋しながらもこれを食 賀地 方の 名物である 治に部 煮」を具にしたうどんだっ た。 父母は ヌ ١

郷愁に似た懐 なんという おい かしさを感じたの しさだ。 濃厚 な味 はなぜだろう……。 が 衝撃的だった。 初め て経験した食べ 物な

くて楽しくて大きな声でしゃ キャーア 父さんが運転してくれて ١١ ハと笑い交わした。 いる車の中で、 くるように笑った。 一緒にいるだけなのに、 ぼくは爺婆と何度も繰り返しキャ ぼくはそれがたまらなく T 21

二泊三日 0 ・カ月に、 北陸の旅から帰ったぼくはその数日後、 してやっとハイ ハイとおぼしき匍匐前進ができるようになったの 父母 や爺婆を喜ばせる進歩をみ

こうにな の旅行期間 無駄が多く稚拙 らったも 中大泣きはしなか のだと思う。 な匍 匐前 笑い 進なのに、 疲れて眠 ったし、大ぐずりもしなかった。 皆が心から喜んでく ってしまったことはあったけれどー れた。 そういえば、 我ながら随分おり

まり立ちなど到底できない。  $\dot{O}$ 運動発達は 心の 時れな Vi ゆるやかだ。生後十ヵ月にもなる 日々を送ってい 母は焦りと不安で押しつぶされそうな毎日を懸命に堪え る。 のに、 お座り が不安定だ。

どもを診てきて、 言 V な のけた。 0 爺は 「こういう子どももいるから心配ない」と迷い んきに構えている。 小児科医として三十 \_\_\_ 年間、 b 惑を V もな 赤 ち V p 口調で N や子

そ もちろん三十一年間、 いるから、  $\mathcal{O}$ 人生のこの プ П 先には フェ ツショ 医師 何 が待 ع し て真摯か iv 0 て の矜持ある言葉だと信じ いる のだろうか。 つ謹厳実直 に診療に当たっ てあげなくては てきたとも なら ない。

考えてい てくれるようだ。 どこまでも優しくどこまでも献身的だ。 爺婆も、 それ なりにぼ 0

ぼくは「人生」という歩みを始めたばかりだ。

てくれている。 人は幸せに生きるためにこの世に生まれてきたのだと、ぼくのDNAがぼくに教え 味わい尽くしてみようと思っている……。 だから、 いかなる事があろうとも、 ぼくはこの人生を心ゆくまで愉し

74

(平成二十六年五月)

## 英虞湾の風 に泣 たあなたへ

出航時間に間に合うだろうか

急ぐ旅ではないのに、ふとそんなことが気にかかる。 年寄りの杞憂だと笑ってくれ

てよい。

あなたと一緒に旅をするのは三度目になる。

思い起こせば、 河口湖畔の宿「うぶや」から仰ぎ見た荘厳な富士山の威容を忘れて

はいない。あなたはまだ生後四ヵ月になっていなかった。

兼六園の中の茶店で食べた加賀名物の治部煮を具材にしたうどんに熱狂したあなた

ようやく生後十ヵ月になったばかりだった……。

を接岸させていたので、船は後方の艫を沖に向け静かに滑り出した。 賢 島の港に停泊していた観光船に乗り込むと、すぐさま船が動きを始めた。 触へき

あなたと、あなたの父さん母さんと、

私たち爺婆は、

船の舳先にある展望デッキに

英虞湾の風に泣いたあなたへ

り出してい ほどなく船は百 八十度回旋 て、 舳先を進行方向に 向け エン ジ ン 全開で英虞湾に

その瞬間、 するとあなたは間髪を容れず、 とい つ 7 41 だろう、 大人でさえ強く痛い 大声で啼泣を始めた。 ・ような 風を感じ 凶暴な

怖くて恐ろしくて、 大人たちは何事が起こったのかと狼狽した。 あなたはその 時 0) 得体  $\hat{O}$ 知 n ぬ

い風の 源は海からの南風で、船の速度は関係なさそらしくて、耐えられなかったのだったのだろう。 船の速度は関係なさそうだ。 まし て台風 何 0)

この船の乗客は私たち五人だけで、 大人たちはあなたの 気持ちを忖度し 船は貸し切り状態だった。 て、 すぐさま階下の船室に あなたを避難させた。

途端に上機嫌となったあなたは、 決して清潔とはいえない 船室の n

が楽しめる場所なのだと、好奇心あふれるあなたの輝く瞳がい 下を有頂天になってすばやく這 い這い 座席につかまりだったりした。 ・った。 ここは

今日、 島を縦断しようとしていたのだが、 中心気圧九〇〇ヘクトパスカルという、 幸運に恵まれて私たちは英虞湾クルージングを楽しんでいるのだ。 案に相違して速度は遅く、 とてつもないスーパー台風十九号が 最も被害が予想され

きゃっ、と全身で笑った。 たは嬉しくてたまらないという表情で、 背もたれにつかまりだったあなたのうしろの座席にはあなたの父さんが 膝と腰をピョンピョンと屈伸させ、 きゃ つ、

船の一つ の扉は全開されていて、 英虞湾を渡っ てきた程よ Vi 潮 風がどこまでも心地

よかった。

船長さんは約五十分の英虞湾 ク ル ズ 0 間 ず っとし Þ ベ り続 け観光案内をし

縄が張ってある島はマ 「英虞湾の中に六十四 ツタケが採れる証明です」……。 0) の島があ って、 マ ツタ ケの 採れる島は六ヵ所しかございません。

に拍手を贈ると、船長さんが照れくさそうに言った。 ラル ーズを終えるにあたり、 ありがとうございました、 と私たちが船長さん

「平成二十六年で、 つまり今年、 拍手を受けたのは四回目です」

船長さんの誇りに満ちた笑顔を見て、 私たちも嬉しくなった。

二人旅も、 台に寄ってみた。 これから私たちは鳥羽水族館をめざす。時間的に余裕がありそうなの いつも婆がお膳立てをしてくれる。 このあたりの計画は婆が綿密に計算したものだった。 ありがたい婆である。 で、 私たち夫婦の 横山展望

らませながら上った。 のゆるやかな折り返しのスロープを、 私たちは足どりも軽く、 期待

はたして、 海と、 英虞湾の複雑なリアス式海岸の景色が幻 島しかない。 たったこれだけの景色が息をするのも忘れるほど美しい のように目に飛び 込 んできた。

は、 鳥羽水族館に入場すると、 ショ の内容と完成度に感嘆し、 うまい具合に 拍手喝采した。 「あしかショー」 あなたもじっと注目しているよ に巡り合 った。 大人

りだった。

の社殿はあった。 白は、 伊勢神宮の外宮と内宮に詣でた。 ひ っそりと鎮まった霊気に包まれて各々

かげ年に参詣すると特に恩恵を授かるとされている。 いるのだ。 伊勢神宮は二十年ごとの式年遷宮を済ませ、 私たちは今、 今年はおかげ 年とよば おかげ参りをし n 7

この杉の木のように真っ直ぐに伸びていけ、 なたの母さんは両の掌を合わせた両腕を、天に向かっ 太い杉の木を背景に写真を撮った。 樹齢は千年くら との祈りがこもったポーズだった。 て突き上げていた。あなたも、 いあるのではな いだろう

と食いちぎり己の命にくみこんだ。 おかげ横丁で買ったタコ天を、あなたの口元へもっていくと、 歯ごたえもあり、 紅ショウガも入っている大 あなたは、 がっ

味を、あなたが受け入れたのには深く感心した。

二連泊した戸田家は、 伊勢志摩国立公園の鳥羽浦に面して いた。 部屋 一の十 階 0)

ら垂直に下を眺めると、 すぐそこは海辺だった。

大人たちは「おかげさま」という銘柄の地酒を友としてご馳走を頂き、 夜を楽しく

過ごした。

夕餉を終えた、くつろぎの時

いた。 び上がらせていた。大きな窓は額縁のように夜の伊勢志摩の静寂な風景を切り取って されて、鳥羽浦の夜景を眺めた。港のイルミネーションが夜の闇の底を、 あなたは、あなたの母さんの両手を頼りに起ち上がると、 そのまま母さんに抱っこ 仄かに浮か

た。 水族館から早めに帰宿し、 早めに入浴を済ませて、私たちは夕食を心待ちにして

ずっと機嫌よく遊んでいたあなたが、 突然泣き出した。

を下方に、 この部屋には、あなたと私の二人しかいない。あなたは激 への字に引きつらせて泣いた。見る見るうちにあなたの双眸は涙に潤んだ。 しく泣い た。 唇の左

そして溢れた。

か、と思えた。こんなに小さく、 泣き顔をみると、あなたがとてつもなく大きな悲しみを抱え込んでいるのではな いたいけな子がなぜ悲しまなくてはならないのだろ

う、 と爺まで悲しくなった。

三十分間の熟睡後、 あなたの母さんが部屋に帰ると、 復活したあなたは、 あなたは安心したのか、すぐさま眠ってしまった。 しっかりと食事ができて、大人たちを安堵

させた。

つも新しい風だ。 あなたに伝えておきたいことがある。風はい いろいろな風がある。 優しい風、 意地悪な風、 つも吹いている。 味方になってくれる しかもそれは V

「さあ、 あなたには、いつも風を感じる感性を磨い 時こそ今」と教えてくれる風が吹いてくることがきっとあるだろう。 ておい て欲しい。 あなたの背中を押して、

のがベターだ。 激しい向かい風の時には無理に前進する必要はない。ひと休みして体力を温存する

気で あなたは いられるように成長するだろう。 いつかきっと、 真正面から吹き付ける強い潮風を全身で受けとめても、 平

82

めていくだろう。 とともに、 英虞湾に降り注ぐ太陽の光、 あなたが英虞湾の風に泣いたということを、 英虞湾の波の煌めき、 英虞湾のかぐわしい 爺はずっと大切に記憶にとど 潮風 0) 句に VY

げさまで」と感謝の気持ちで生きていけたなら、 になるだろう……。 「おかげさまで」と今日 0) \_\_ 日を感謝 の気持ちで終えて、 人生は間違いなく楽しく美しいもの 明日になれば、 また「おか

## 土肥ブル

に避難を求めたところ、全員の避難が確認されたという。 大な被害をうけた奈良県十津川村では堰止湖が決壊の恐れありとして村内全域の住民 台風十五号は沖縄付近を反時計回りに迷走している。 二週間前に、 台風十二号で甚

晩夏 暦の上では秋が立ったとはいえ連日夏日が続い 7 Và る。

こんな日に、 私たちは富士山を望む旅に出る。

天竜、 大井、 富士の川を越えた。新幹線は途中運転を止めるの では ない かと思われ

るほどの激しい雨に襲われた。

光の束が刺した。 傘を差しながら修善寺の町をそぞろ歩いていると、 雨に洗われた竹林の煌めきが美しい 時折空の裂け目から白 しい

ワインディングロードを昇り、 船原峠を越え車は坂を下った。

相模湾に出て国道百三十六号線を湾沿いに行くと、宿への入り口を示す看板が左手

84

7

目の前 に静謐な台地がひらけた。 ここは西伊豆、 土と肥い

今宵の宿は高台の里山 0 中に佇む「水の里恷 富岳群青」 である。

宮」を匂わせる言い回しに違い 辞典を引 心を休ませる いたところ、 とい 驚いたことに存在していた。 う文字は創作文字だろうと考えていた。 な 11 でも字義は未詳だというから 帰宅してから漢和

てなされた。 のチェ 名残りの ックイン は、 夏に相応しい心遣い 冷たいおしば りと冷た だ。 W 、抹茶の 生チョ コと冷たい 紅茶

あろうかという広々とした空間だった。 うと いう雅やか名の部屋に案内されて、 重厚な扉を引くと、 玄関は 四畳半は

とつだと思う。 運山 ン居室の の青のみだ。 ソフ 空の青と富士の青を、 ア ーに身を預けて駿河湾を眺 ただ心待ちに待とう。 めた。 今見える青は 待つことも歓びのひ 海 の青と近

空が茜色に夕焼けてきた。

水庭にやってきたらしい は大合唱となるのですと案内のスタッ ウォ 渡り廊下をたどりディナー ーターガ ーデンの水面にはアメンボが滑走していた。 に向 かう。 フが教えてくれた。 赤卜 ンボが宿 0) 最近は蛙も棲み 絶滅危惧種のタ 壁面に翅を休め Ó ガ Ż て 41 て夜に Vi

メニューにもこの宿の誇りを感じた。 心もとろけるような創作フラン ス料理に舌鼓を打 0 た。 シェ フ直筆 0 サ ン がある

の宿はオ ベ ル ジュあるいはエルミター ジ ユ 隠 れ家と呼ぶ方が 良 Và か

1,

息の時はゆ の間を告げる虫たちの声が、 夕食後、 っくりとためらい 部屋に戻 ってテラスに出た。 自分は日本人であってよかったと感じさせてくれる。 がちに流れてゆ 静寂 の智な 明日はきっと晴天になるだろう。 の中で虫がすだ 13 7 14 る。 夏と秋と

翌朝、 目が覚めると妻は既に起きていて、 クをいいことにビールを三本も空けて陶然となり眠った。 富士に面した二面の大窓の電動ブライ シ

-をあげ Ć いた。 小屋根に蓋 われて露天風呂を有する広いデッキテラスに出た。

薄墨色 てい た富士を目の当たりにして、 の富士が、 暁 、の空を背景に駿河湾に浮かび立つように眼前に屹立してい。\*\*^ゥゥ 願 いは叶えられたと思うと目頭が熱くな った。

心を虚空に追いやり、無心に富士を眺めた。

ひと群 0 4 クドリが礫の n 0 雀が前庭の ように前庭の崖を駆け上り目の前をすり抜けてい 垣根をかすめて宿 の大屋根を越えて里 Щ 。 の 方に 「姿を消 った。

いると、 満腹になったカマキリは、 い過ぎて命を落としたのだと思った。 いる。 ふと見ると、 ても食らうことに対する恐るべきカマキリの本能に、 台風十六号は伊豆半島直撃か、 最後は また鎌首をもたげるではない はじめは身悶えしていた青虫は コウモリの糞のような小さな黒い 一匹のカマキリ べったりと腹も脚も伸ばしきって身動きしなくなった。 が己の身体くらいもある青虫を捕えてそ と思われてい か。 食い過ぎてくたばるなど哀れなものよと思って やがて風船がしぼむようにみるみる体積を 見つけた小さなバッタを狙 たのにどこかに姿を晦ましたらしく かたまりとなっ 凄じき命の営みを感じた。 て葉先にぶらさがった。 5 ていた。 の体液を吸 ó

河湾は凪いでいる。

らえ悠揚と旋回しながら蒼穹の高みへと昇っていった。 少し強 くなった海風を頬に感じた。 トンビが翼を羽ばたかせることもなく、 風をと

途中、 今日の昼間、 自宅用にワサビー本を買い 私たちは天城峠を越え、 求め、 金ぇ 目ゕ 浄蓮の滝、 鯛の干物などのみやげ物を宅急便で送っ 河津七滝を経て 下 田 0) 町を巡 つ

とりと見晴らした。 帰宿し一日の 汗を流 した後、 石造り の露天風呂に浸か つ て 夕暮 n 0) パ ノ ラ 7

クリームソースは絶品だった。 浴衣掛けで、 日は落ちて、 残照の富士が色濃き群青 ゆったりと寛ぎながら夕食を堪能した。 楽しいまどい の青富士へと色を変えて に身も心も癒された。 真鯛の 神香蒸 11 った。 赤座海老

てもらった。 部屋へ戻る途中、 宇宙とつながって 背景の青に同化されて青一色に染まって幸せそうな笑顔で写っ 幻想的にイルミネイトされた水庭を背景にスタッ いるようなこの青を私は「土肥ブルー」と呼びたい。 フに 写真を撮 て W

部屋に戻ってまたテラスに出た。 空も海も里も暮れゆき、 ぬばたまの闇に包まれて

88

13

駿河湾の岸近くに は、 かがり火を点した数艘の 小舟が ?浮ん で VI た。

寝息をたてている妻を横目に、清酒「富岳群青」 三百ミリリ ツ トル二本と、 ビー ル

本を空けた。 己一人のみの豊穣な宴に酔った。

三日目の朝、 五時に自ら目覚めてテラスに出た。

富士山の鋸歯状 の剣が峰のみがわずかに見えた。 部分だが、 日本一の頂だ。 富士

の本体と広 く棚引く 裾野は雲に遮られている。

それでも私は確信 している。 必ず富士は私たちの前に姿を現すはずだ。

三角形が見えたことを思い出した。 高校生のとき登った厳冬の六甲山系の、 神戸 ́の 確か石楠花 地から微小ながらも富士山が見えるのだと、 |山から富士山頂とおぼしき白やササ Và

その当時は奇跡のような出来事に感激したものだが、 実際には見えないことを、 最近

ようやく知

つた。

あの白い三角形は幻だったのだろうか。

視界を蔽 いってい た雲は見る見るうちに散り消えてゆく。 圧倒的な勢いで姿を現して

くる富士の全容に息をの んだ。

私たちは今、 目 の覚めるような空の青、 喜びに満たされている。 高貴なる富士の青、 大い なる平安の土肥ブル 照り返す駿河湾 0 0 輝 中に溶け込んでゆ く青に包まれて、

野分き去り 魂震るわする 青 0 富士

富士へ の深甚なる感謝を捧げて旅を終えた。

(平成二十三年九月)

誕生日おめでとう、 とい って皆で乾杯した。

妻は還暦を迎えた。

始めたところだ。 僕たちは 宿に二連泊して、 いま、 「ロンギングハウス」と ロンギングハウスとは、 日常を打ち遣って、 円かな時を過ごそうと半年前から決めて輩という意味なのだろう。僕たち いう名の軽井沢の宿で旅 0 泊目 の戦 僕たちは

能なのではな 僕にとっ ない 人たち っった。 7 初孫 14 そろそろ君にも分別ができてきて、 かと考えた。  $\sim$ の迷惑を回避するため、 の君とは、 河 金沢、 三列シート、 伊勢志摩の旅をし 公共交通機関を利用することも可 八人乗りの てきた。 レ ン これ タカ Ġ 0 旅 n

東海道新幹線 「のぞみ」で東京に至る。 そこで北陸新幹線 「あさま」 に乗り換えて

君たちは京都まで帰るという、 「かがやき」に乗車、そして金沢で在来線の特急「サンダー 帰りは 「はくたか」で長野まで運んでもらう。 ぐるりと反時計回りのルートを考案した。 ここで同じく北陸新幹 バード」に 乗り換え、

ろい する列車はすべて一番と二番のD・E席に統一して座席指定した。 鏡や風車などの小物を買い求めていた。そのなかで君が最も興味を示したも の後ろに収納し、 新幹線の中で、 一番と二番のD・E席、 ろな場面に応じて好きな場所にシールを貼る遊びだった。 一ヵ月ほど前の四月五日の日曜日にJR三宮駅の窓口に赴いた。 君がぐずればすぐさまデッキに移動できるようにと考慮したからだ。 君が退屈し、 進行方向に向かって最後列の、 機嫌を損ねてはならぬと、 爺婆は君が遊ぶための万華 通路の左側にある席を確保 ベビーカーを座席 のは 旅で利用

ち大人は全員「六甲山縦走弁当」を食した。君にはオムライスがメインで、 好みそうな惣菜が添えてある「リラックマ弁当」 東京駅には十二時五十分に到着予定だ。それまでに昼食を済ませておこうと、 っかりと食べ、 ずっとご機嫌でいてくれた。 を爺が選んでいた。 君は期待に応え

女性 ば ス イ 人気があるら ス 0) ペ Ξ ンのような外観だ Vi った。 「野菜の お 14 を売り 13

グテー ・ブル が二台据えてあり、 ルも置い ツ フに部屋 てある。 へと案内された。 大きな湯船 ゆったりとしたソファ のあるバスル 君たち 0 部 屋は とテーブル、 ムも広い ワン フ 口 四人掛け ア 0 和 洋 Ó ダイニン ダブ

隣に爺婆の つ 7 部屋があって、 て、 ここにもダブ こちらはメゾネット ル ベッド が二台あった。 タイプの洋室だ。 この二部屋で一棟とな 二階 が ベ ッ つ て ル

を一段上に上せて 支えにして右足を一段上に運 けざまに段登りに挑戦 君を爺婆部 で Oすばしっこく二階まで上がっ 右の足底を上 0) 階段の いた。 ところが今日の君は、 下に んでいた。 の段に乗せると、 立たせると、 いともたやすく二階に達した……。 ある てしまった。 さっ 41 左右の は、 次は左の そく君は 左の 抱っこして下 足の裏でしっ 膝を上の 膝を右足 階段を攀じ 段に乗せてから右足  $\bar{o}$ か 横 登 におりると、 りは に並べ、 h は 左膝を

まで時間 選択ですと褒められた。 があ 土地を知らな の移動はすべてタクシーを利用した。 ったのでハルニレテラスに向った。 い人が自家用車で移動すると大変な目に遭うとのことだ。 タクシー の運転手は裏道を知って 宿 0 ス タッ フ いるので難なく目的地に行 から、 それ が 番賢明

その 局所に塗布 ここで僕は左の耳介を蜂に刺された。 切符なら保管してあります」と事も無げな答えが返っ りたときに乗車券を取り忘れ した。 僕は復路、 皆にはその無用とも思える周到さを呆れられ 軽井沢駅 てい の自動改札で足止めを食った。 たのだ。 おもむろにリンデロン 駅員さんに事情を説明すると、 てきた。 VG てい たかも 往路、 軽井沢という小さ 膏を取り しれ 「あさま」 h

が の遊歩道を、 ニレテラスの 61 7 君は父さんにベビー ウッド 7 ゴが棲むという小 デッキを、君は嬉々として歩んだ。 荊 カーを押されて逍遥した。 のせせらぎの音も聞こえる。 その あと 滴るようなみどり 僕は少し離れ 21 ル レ

時

ある。そうい

だからこその、

奇跡的で幸運な出来事だった。最近、 う齢になったということらしい……。

僕は小さな失敗をすること

憐で慎ましやかな花だ。 て君たちのあとを歩いた。 路傍にひっそりと小さな菫の花が咲い て 61 た。 濃 41 紫の 可か

94

桜の老大樹もまだ遅桜ではなく、 今を盛りと咲き誇っ て 11 る。 ŋ 初そ めたば か

降り注いでくる 凛と天を支えるようにそびえ立つ樅紫 0 木 々 のあ わ V から、 鶯のさえずりや鳶

イナッ などの様々な野菜がミックスされている。 いストロ なかでも君はこの宿のスムージーにすっかりと心を奪われたようだ。 宿に戻り、 ージーを味わった。 プル を使って平らげたはずだ。 、オレン 乾杯の あと ジをベースとした混合果汁に、ホウレンソウやニンジン、 君は四回の食事すべて、 「野菜の お Va しい 宿では朝夕二回、 」食事に舌鼓を打 少なくとも三人分のスムー 計四食したので四 った。 マ ジ ゴ 1

かすめ流れた……。 夜遅く、 玄関を出 て天を仰ぐと満月が懸っ て 13 た。 浮雲が満月の面を撫

と焼酎を購うことができて、 ることだけに神経を集中していて、 明けて、 午前中に旧軽井沢の町をそぞろ歩い 僕の旧軽井沢散歩の目的は達成した。 他の事には興味がなかった。 た。 僕は今晩の晩酌用の飲み物を求め 幸 Va K 地元の銘酒

か った。 ぽつぽつと雨粒が落ちてきた。歩を速めてアウトレットへと向 った。 傘 は

地を踏み アウト レ ット ゥェ ス の広大な芝生を、 君は歩んだ。 軽やか に、 そして荘重に、 大

曇っていた。 芝生の向こうに、 お椀を伏せたような離山 が見える。 雨 は止ゃ んだが空はどん

君は足元に寄ってきた犬を怖がり もせず、 腰をか が め そ の背中 を愛お

なければならない。 辟易した僕たちは、 アウト は大変な人混みだった。 コンビニの精算でさえ、 駅北の大衆食堂で腹を満たすことにした。 昼食を摂るに 店の外にまで人が溢れて列をなしている。 時間あまり も行列に並

96

ところがどうしたことだろうか。 では、 先ほどまであんなに機嫌を崩していた君が、 屋外に出てみると、 駅北の美しく整備され 悦びの声をあげて歩い た たの 口

君は這は みて安全なのだと知っ れま い這は で Vi 0 君は に切り替えてその場所の安全を確か いつも慎重だった。 ても、 君はやはり這い這いでそこを乗り越えていた。 歩い 7 11 て、 ルめた。 地面 かがみ込んで手の平 の 色調 の変わる場所に で触 .来る 0

はひと続きであり、 ら両手で 今回は違っていた。 マンホー っと触れ で、 ルの縁にも触れてみた。 呑み込まれることはないのだと、 マ ロータリー ンホー ルがブラックホー の装飾されたマ いま、 自分が立っている地面とマン ルではないことを確認した。 ンホールの蓋の前に来ると、 しっか り確かめた。 そうして君 ホール それ まず

は足を踏みしめてマン る歩みを進めた。ふたつのマジックテー 判断と行動に誤りがないことを確信したのだろう。 ックスの靴も君を応援している。 ホ ールを乗り越えた。 プで足を包み込むようにしっかりと固定する マン ホー よりいっそう雀躍として確固た ルを己が足で越えた君は、

た。 に雨降りになるのです」と教えてくれたのだ。 「軽井沢の天気は山の天気といっしょなのです。 「あなたの気分は軽井沢の天気とい 実は今朝、 旧軽井沢までのタクシーが来るのを待っているときに、 つしょ ね」と君の母さんが、 晴れて いると思うと、 V٦ みじく あっとい 宿のシェ b フが う 言 つ

つまり山の中に位置しているのだ。 考えてみれば軽井沢という町は、 浅間 Щ 「の南東 の麓を 0 標高約千 ķ IV 前 後  $\mathcal{O}$ 高 原

アウトレ 君もそれを味わわせてもらった。 たちまち高貴な香りと甘さの虜になってしまったようだ。 ット にもどると婆が行列に並んで、 はじめはその冷たさに身震い ミカド コ 1 1 のモカ して当惑した君 ソ フ ・を買 0 7

婆は君に似合いそうな何着か の服やズボンを買った。 ア ウト V ットとは いえ、

98

に満たされた。 に寄っ 夕食時に、 キャ てきて君と遊ん 僕たちも皆、 ッ、 なぜか君を気に入ったらしい。 ウフフ、 サラちゃ アハ 声を合わせて笑った。 んという名の七歳の小学二年生の女の子が自席を離 でくれた。 ハと、 君もサラちゃんも笑った。 い。サラちゃんは君の所作を真似て、サラちゃんには君と同じくらいの年 もった。 一瞬にして僕たちの周りが和やかな空気 屈託のない華やいだ笑顔 て、 頃え の妹 君を喜ば が 君 V 0 た

とグズグズ 君は興奮し過ぎたの V Vi 続け 日付 か、 ある の変わる頃ようやく眠 11 はサラちゃんに恋をした りについたら 0 か、 夜 Vi 0 九 時 頃 か つ

雨音が僕を慰めてくれた。 にな  $\bar{O}$ 夜 いった。 の 晩酌は独り 侘しくなっ 酒になった。 て外に出てみると冷たい 楽しみにしていた君の父さんとの 雨が降っていた。 静かでやさし は かな Vi

野県内 三日目 円 の朝、 二十一度程度まで気温は上昇するでしょうと報じていた。 軽井沢の気温は六度まで下が 9 た。 それでもテレ ビ の天気予報 長

ができた。 ラは一輪も 皆がそろっ 軽井沢タリ 花をつけ アセンに入場して、 てゆったりと朝の食事をした後、 Ź 11 なか つたけ ロー れど、 ズガーデン 今日は厳 軽井沢 や塩沢湖の周りの散歩道を巡 か タリアセンをめざした に屹立する浅間山を望むこと

あ ったろう 道の途中の 丘 小さな動 物 園 0 催 があ った。 ここで の 出来事が 今 口 0 旅 0 白は 眉ば で

にもさわ しっと長 0 生えた、 ふわふわの ってみた。 13 あ 頬ほの Và からだと頭に だ不思議そうにウサギを見てい 白 Vi 小 型の 黒ヤギの額と、 触れてみた。 ウサギは身じろぎもせずに V た君は、 かにもゴ 意を決 ワゴワとして硬そう したか いた。 0 よう な尻尾 ゥ

父さんに抱 までの君は、 ^ の慈しみという新たな感情が萌芽し始めてい っこされて、 宝物の ようにだ ア ĺ パ 力 11 の肩を撫でて、 じにされ愛されるばか 写真を撮ってもら るのだ。 りであ つ った。 14 、ま君に

よこの集合する小さな囲みがあった。

ひよこたちは身を寄せ合うようにして囲み

教えたつも 重みを感じさせない しくひよこを掬く りだった。 ふわふわで、 い上げて、 はかな 人の体温で溶けてしまいそうな綿菓子のようなひ 14 ひよこの ほどの軽さが痛 扱 13 はこんなふうにするのだよ、 々しかった。

ことを知らない君だから、 君はそのひよこが可愛くてならなかったのだろう。 々 しくて思わずかば 僕は慌てて君の手からひよこを解放した……。 いたくなるようなひよこを 小さな手でついと掴った -。まだ力加減をするとい みあげ

が食欲をそそる。 ながら昼食に 大きなピ ウト ゆで卵の具材がぎっしり詰まっている。 ットウェ ロシキで普通のピロシキの二~三個分くらいありそうだ。 した。 た父さんの膝に乗り、 ロシア人直伝 スト お弁当の  $\dot{o}$ 池 の呼ばとり ひとつは、 の製法で作ら の芝にビニールシートを拡げ、 軽井沢駅 父さんの体にすっ れて 薄塩味で、しつこくなくナツメグの いるらしい の売店で買った沢屋のピロシキだっ ぽりとおさまって父さん 真澄空の、 挽り肉、 もとで憩 玉ね

ピロシキを食べさせてもらった。 いしそうに君は食べるのだ。 いおい しいと満足そうに笑顔を見せる 君の食べっぷりに おい しいね、 のだ。 というと、 は V2 0 も感心させられる。 君はこっくりと頭を傾け、

もうひとつのお弁当は大人たちに幸福感を与えた。

これらにしようと僕は昨日から決めて 今日は十五分ほど待ってテイクアウトした。 の昼、 入店を諦めた明治亭のソースヒレカツサン いた。 今日の昼餉  $\mathcal{O}$ ドとソ メ ニュ ス 口 は ス 力 な がら、

コン ポテトサラダはあ 故に、 ウスは確かに「野菜のお クランブ 口 シキとソ 0 ったが、あとは全て生野菜のみで温野菜はなかった。 みであった。 エッグ、 -ス豚カ ボイルド ツは、 そのため正直言って、 いしい」 今回 エッグなども一切なく、 0 宿ではあった。 旅 0) 食事の 少なくとも僕は食傷 中での点睛だったと宣言 が、 蛋白源とい 例えば朝食にし して

花筏が 池の向こうから僕たちの 11 るこちらに向け 行儀よく幾筋 か 0)

て漂って来る。 花びらたちは、 ひとひらひとひらの桜の花びらが光の粒子のようにさんざめい 風に吹き寄せられて岸辺に寄った。 すると全員集合して濃い桜色 て Vi

の太い帯となって、 池の縁で澱みはじめた。 遠近から子供たちのはしゃぐざわめきと

歓声が聞こえてくる。 た声が聞こえてくる。輝く命が犇めき合っている。時おり、頬を打つような強い風が吹いた。遠近か

な造形を眺めながら佇んでいた。 お昼ごはんに満足した君は、池のたもとで父さんに抱っこされてこの花筏の不思議

母さんに引かれ、 それから僕たちは、また歩いた。段差のある所や砂利道に差し掛かると君は右手を 心と心を繋ぎあって、さらに僕たちは歩いた。 左手を爺の手と結び、 ピョーンと障害物を跳び越えた。 手と手を繋った

あった……。 このようにして歩いているうちに、 君の心と僕たちの心は、こだまのように響き

君が掴みあげた、 あのひよこは、 今も元気に生き延びてくれているだろうか

(平成二十七年五月)

## あ

たの きた記念に、 うかとの、 「ウェディ で、 それではお言葉に甘えて……、 還暦を迎え ありがたい義母 ングステッ ある V た妻に続き、 は生きた証として、これまで書い プ」をこの本の冒頭に置いたのには理由が の申し出があった。 私も来年、 という訳でこの随筆集が 本卦がえりの齢に至る。六十 出版費用まで義母 てきた文章を自費出版してはど ある。 できあがった。 が持つと言っ それはなぜ私 年を生きて てくれ

痛で迷惑なことだと、 といういわば強制的な執筆依頼によってであった。 ことはあったが、 それまで私は、 ところが、 娘の結婚の時にはさすがに己の心の奥深いところの己と向き合わざるを 兵庫県医師会や兵庫県小児科医会からの依頼で それはリレー 身を入れることもなく適当に書い 随想のような、 次は誰々さんにバトン 何を書いてよ て原稿を送付して 数編 11 やら、 タッ 0 文章を とにか チします、 44 が文章を書くようにな

ったのか、ということとも関係している。

得なか うだった。 議な気持ちが私の中に芽生えた。 それからだった。 った。 「父から娘への手紙」 人生の節目の出来事を、 娘の結婚がトリガーとなり、 では言の葉を愛おしむように選び、 記憶ではなく記録に残したいとい 化学反応を起こしたよ 娘に 語り う不思 かけ

も稀だ た紀行 旅の記憶を詰め込んだつもりだ。 この小冊子を随筆集と銘打っては 文だ。 ったから、 勤務医時代には夫婦の旅どころか、 ح の本には平成二十三年五月から平成二十七年五月までの四年間 いるが、 ほとんど旅を記録し、 子供たちを遊びに連れて出歩くこと 感じたことを綴っ 2

ころで あった。 私の作文の第一読者になってくれ は「もう少し書き足せば 分かりにくいところには鉛筆でクエスチョンマークを入れ、 ―」と言って、具体的な指示は たの は、 V つも妻だった。 そし しな て、 妻は 物足りな 編集者 V で

医者 妻の 示唆を参考にして書き直すと、 の女房にしておくのはもったい 不思議なことに文章に深みと冴えが加わ ないほどの、 誠に良き編集者である。 感謝して った。

る。

最後になりましたが、こんなところまでお読みくださったみなさまに心よりお礼申

## 随筆集 光の中へ

2015年11月13日 第1刷発行

まえだえいさく 著者前田衞作

発行者 太田宏司郎

発行所 株式会社パレード

大阪本社 〒530-0043 大阪府大阪市北区天満2-7-12 TEL 06-6351-0740 FAX 06-6356-8129 東京支社 〒150-0021 東京都渋谷区恵比寿西1-19-6-6F

TEL 03-5456-9677 FAX 03-5456-9678

www.p-press.jp

印刷所 創栄図書印刷株式会社

本告の複写・複製を禁じます。 ©Eisaku Maeda 2015 Printed in Japan ISBN 978-4-86522-067-4 C0095